

イヴァン雷帝とクールプスキー公 の往復書簡試訳 (III)

栗生沢 猛 夫

(Ⅲ) クールプスキーがイヴァン雷帝に宛てた第二の書簡

モスクワ大公のいとも冗長なる書状にたいするアンドレイ・クールプスキーの簡潔な返書¹⁾

汝の大仰で騒々しい書簡を受けとった。わたしはそれが抑えがたい憤怒から毒の言葉をもって吐き出されたものであることを知り、かつ理解した。だがそれは全世界で栄光を称えられる偉大なツァーリにあっては言うまでもなく、一介の賤しき兵卒にとってすらふさわしくないものであった。ことに聖典からの数多くの引用を含みながら、激しい怒りと残忍な心とをもって記されているからには、なおさらのことである。それは円熟した学者が、ある事柄について他人に書こうとするときに通常行うように、数行ないし数節を引用して、簡潔な文章の背後に深い知恵をひそませるのとはちがって、並はずれてしつこく饒舌であり、書物全体ないしパレミヤー²⁾や書簡の全部が引用されている有様だ！寝台のことが述べられたかと思うと、婦人用胴着のことや他の無数の事柄に話が及ぶ³⁾。気の触れた女の戯言^{たわごと}よろしく、まことに下品この上もない。円熟した学

- 1) 本書簡には執筆時期が明示されていない。シュテーリンは、諸公領の没収などへの言及があることから、これをオプリーチニナ導入後（すなわち1565年初頭以降）のことと考えている。フェネルも本書簡に若干のポロニスムが見られるところから1565年以前ではない、と考えている。これについてはさらに、本稿（I）—110頁を参照。なおこの書簡は直ちには発送されなかった。
- 2) 旧約聖書からの抜粋集。原語はギリシア語で（*παροιμία*）、諺、格言、たとえ話の意。
- 3) 寝台とは、おそらく本稿（I）—152頁のИ. В. シューイスキー公が肘をついていた寝台であり、また婦人用胴着とは、同153頁のシューイスキー公の毛皮外套をさすものと考えられる。

者は言うまでもなく、凡人も子供も驚きと嘲りの念をもって読むことであろう。ましてや文法や修辞法はおろか、弁論術や哲学にも長けた人びとのいる異国にむけて「かくの如き書簡を送ってくるとは、笑止千万と言うほかはない。」

それだけではない。汝はわたしにまで——この流離^{さすらい}の身にあつて極限にまで卑しめられ、幾たびも辱しめを受け、不当にも追放され、しかもなお、たとえ罪深き存在ではあるにせよ、心の目と粗野ならざる舌をもつこのわたしにまで——神の裁きを待つことなく、かくも威嚇的にかつ騒々しく脅迫し、恫喝してきたのである！悲嘆にくれる者を慰める代りに——「苦境にある者を辱しめるな。彼はもう十分に悲しんでいるからだ」と言った預言者の言葉⁴⁾をどうやら汝は忘れ、無視しているようだ——陛下はこの罪なき流離の身のわたしを慰めるところか、かくの如き「言葉を」もって襲いかかってきた。願わくは神がこのことのゆえに汝を裁かれんことを。汝はこのようにして罪なきわたしに背後から激しく咬みついたのだ！若年の頃から汝に忠実に仕えたこの身であるのに。わたしはこれが神の御旨にかなうことだとは信じない。

わたしは汝が一体われらから何を望んでいるのか分らない。汝はすでに大いなるウラジーミルの一族から出た同族諸公を、様々な方法で死に至らしめただけではない⁵⁾。汝の父も祖父も奪うことがなかった「彼らの」動産や不動産を「汝は没収した。」⁶⁾それだけではない。わたしは福音書の言葉をかりて大胆に言うことができるのだが、われらは驕り高ぶるツァーリ陛下が最後の下着をも奪い取る⁷⁾のを黙認したのである。ああツァーリよ、わたしは汝の言葉の一つ一つに答えようと望んだ。おそらくわたしはこれを巧みになしうるであろう。

4) ベン＝シラ 4 : 2, 7 : 11。

5) 大いなるウラジーミルとはウラジーミル聖公（在位980頃—1015）のこと。その一族とはすなわちイヴァンもその一員であるリューリク朝諸公のこと。

6) イヴァンの祖父（イヴァン三世）と父（ヴァシーリー三世）は国土の統一＝諸公国の征服・独立の奪取を積極的に推進した。だがその際、たとえばクールプスキーが属するヤロスラーヴリ・ロストフ諸公はその宮廷所領については世襲地として領有し続けた。クールプスキーは、雷帝がこうした所領をも奪いとったと考えているようである。オプリーチニナ期の所領没収策への言及と考える史家が多い。

7) ルカ 6 : 29, マタイ 5 : 40。

なぜならわたしはキリストの恩寵により、たとえ年老いてからのことにせよ、この地においてアッティカの言葉⁸⁾を力の限り学んで理解することができるようになったからである。だがわたしは筆をもつわが手を抑えよう⁹⁾。先の書簡において汝に書いた如く、わたしはこれらすべてを神の裁きに委ねたからである。わたしは熟慮の上、この世では沈黙を守り、あの世においてわがキリストの玉座¹⁰⁾の前で、汝により迫害され殺害されたすべての者たちとともに、大胆に語ることの方がよいと判断した。ソロモンが「そのとき義人たちが迫害する者たちの面前に立つであろう」と述べているようにである¹¹⁾。キリストが裁くためにやって来ると、彼らは迫害し辱しめた者たちを大胆に告発し始めるであろう。この裁きの場では、汝自身がよく知っているように、依怙最賈されることがなく、各人の心の正邪が明るみに出され、証人に代わってそれぞれの良心自体が叫び、証言を行うのである。加うるに、騎士たる者が奴隷のように罵り合うべきではあるまい¹²⁾。いわんや、すでに何度も述べた如く、われらキリスト教徒が汚れ多き中傷の言葉を口にするなどは一層恥ずべきことである。こ

-
- 8) クールプスキーが亡命後学んだという「アッティカの言葉」 язык аттически (аттически という写本もある) はギリシア語と解するのがもっとも自然であるようにみえる。だがリュコフはクールプスキーが亡命後長期にわたってラテン語の修得に心がけたことなどから、これをより一般的に古典語、とくにラテン語と理解する。写本のなかに язык антически としているのがあるのはこれを裏付けている。シュテリーンやフェンネルは他の諸写本にみられる язык отеческий という読みをとり、祖国の言葉すなわち古代スラヴ語ない教会スラヴ語と解すが、リュコフはこの読みを後代のものとして斥けている。ところでクールプスキーはここで「年老いて」いたと記すが、本書簡執筆当時彼はおそらくまだ40を越えていなかった。
- 9) ここで「筆」と訳したのは трость, すなわち葦ないし細い杖。ロシアでは葦製のペンは使用されていなかった。おそらくここはクールプスキーの言葉の遊び。彼の「筆」はすなわちツァーリにたいする杖 (= 答) というわけである。彼は後に第三書簡で「敵の愛想のよい接吻より、友人の答や棒の方がましである」というイザヤ書の文句を引用している。
- 10) クールプスキーはここでポーランド語からの借用語 маестат を用いている。(さらに第三書簡、本稿71頁でも同様) 彼のポロニスムの例の一つ。
- 11) ソロモンの知恵 5 : 1。
- 12) 騎士 муж рыцарский への言及もクールプスキーにおけるポロニスムの影響とみることができよう。もっとも騎士道精神を説くことは雷帝にとってはあまり意味がないようにみえる。

れにたいしわたしは、三位一体の神と称えられ、崇拝される全能の神を信頼しようと考えた。というのも神はわが魂の証人、わたしが汝の前にかなる罪をも感じていないことを知っておられるからである。だからしばらくの間待とうではないか。なぜならわたしはわがキリスト教徒の希望であるわが主なる神、救い主イエス・キリストの再臨が近く、[われらがまさにその] 門口に [立って] いると信じているからである。アーミン。

(IV) イヴァン雷帝がクールプスキーに宛てた第二の書簡

以下の書簡が君主からアンドレイ・クールプスキー公に宛てて、アレクサンドル・ポルベンスキー公を介してヴォロジメーレツより送付された¹⁾。

- 1) 本書簡は末尾に記される如く1577年に執筆された。この年ロシア軍はポーランド領リヴォニアにむけて大攻勢をかける。7月13日イヴァン自身の率いる16,000のロシア軍はプスコフを陥し南リヴォニアに侵攻し、7週間足らずのうちにこの地方のほとんど全域を占領した。勝利に気をよくしたツァーリは、遠征の先々からかつての敵たちに対し次々と書簡を執筆する。このうちヴォルメル(ヴォロジメーレツ)で執筆した五書簡(ステファン・バトーリー、ヤン・ホトケーヴィチ、クールプスキー、タウベとクルーゼ、チェチェーリンらに宛てられた)をツァーリはポルベンスキー公に託して各人に届けさせようとした。アレクサンドル・イヴァノヴィチ・ポルベンスキー公はポーランドへ移住したトルベツコイ公家の一門の出で、当時リヴォニアにおけるポーランド王の副総督であった。彼はすでに1560年にヴェンデン(ケシ、現ツェシス)とマリエンブルクでロシア軍を破り、1569年にはチェチェーリンらとともに策略を用いて(配下の兵にオプリーチニキを装わせて)イズボルスクを奪取した。また彼はクールプスキーの姻戚者で、クールプスキーが亡命後ロシアの人びとと密かに交信を続けるのを援助した。このためツァーリの憤りは激しく、1577年に攻勢に出るに際して、プスコフから彼に宛てて非難の手紙を書き送ったほどである。それが数週間後に、彼がヴォルメルで雷帝の被保護者であったリヴォニア王マグヌスによって捕えられ雷帝に渡されたとき、雷帝は彼を罰するどころか、逆に釈放し、クールプスキーらに宛てた五通の書簡を託してポーランドへ帰したのには訳があった。すなわちある史料によれば、上記マグヌスは雷帝の軍の攻勢が始まった頃ポーランドへの接近をはかり、ポーランド王ステファン・バトーリーと秘密の交渉に入っていたが、マグヌスのこの企図はやがてポルベンスキーの知るところとなり、彼はこれを捕虜になる以前に雷帝に伝えたという。雷帝のポルベンスキーへの態度の激変はおそらくこの件と関係があると考えられるのである。ところで雷帝の第二書簡は13年前のクールプスキーの第一書簡を思い出して、それを念頭において書かれたものである。クールプスキーの第二書簡は、既述の如くこのときまだ雷帝の手許に届いていなかった。

全地を隅々にいたるまでその掌に収められる主なる神、父と聖霊とともに一体として崇拝され、称えられるわれらの救い主イエス・キリスト。その全能の万物を支配する〔神の〕右手は、われら賤しきとるに足らぬ僕に憐れみを垂れ、ロシア帝国の王笏を所持することを許し給うた。この万物を支配する右手はまたキリストを描く旗をも〔われらに与え給うた。〕かくてわれら全ルーシの、ウラジーミル、モスクワ、ノヴゴロドの大君またツァーリにして大公、カザンのツァーリ、アストラハンのツァーリ、プスコフの君主、スモレンスク、トヴェーリ、ユゴル、ペルミ、ヴァトカ、ボルガル及びその他の地の大公、低地ノヴゴロド、チェルニゴフ、リャザン、ポロツク、ロストフ、ヤロスラーヴリ、ベロオーゼロの君主にして大公、ドイツ騎士団のリヴォニア、またウドル、オブドル、コンディンの世襲的君主にして支配者、全シベリア地方と北部諸地方の号令者たるイヴァン・ヴァシーリエヴィチは²⁾、われらの前貴族、軍司令官アンドレイ・ミハーイロヴィチ・クールプスキー公に書き送る。

ああ公よ、わたしは身を低くして汝にお願いしよう。どうかわれらの罪、とくにわたしの不法行為にたいする神の御旨の大いなることを思い起し、よく理解するように。それはマナセの不法にまさるものであったが（もっとも背教の罪をわたしは犯さなかった）³⁾、神はわたしの回心をじっと待っていて下さったのである。それゆえわたしが創造主の憐れみにたいする信頼を失うことはない。彼はわたしを救って下さるであろう。聖なる福音書において彼自らが述べられるように、悔い改めた一人の罪人は99人の義人にまさる喜びなのである⁴⁾。

2) イヴァン雷帝のここにみられる称号は当時の他の諸文書のそれとほぼ一致する。このうちユゴルは北ウラル地方（ペチョラ、オビ両川にはさまれた地方）で旧ノヴゴロド領、ボルガルはカザンの南、旧ヴォルガ・ブルガル王国の首都、低地ノヴゴロドはニジニ・ノヴゴロドのこと。ウドルはおよそメゼニ川、ヴィチェグダ川、北ドヴィナ川に囲まれた地方、これも旧ノヴゴロド領、オブドルはオビ川河口地方コンディンはコンダ川（オビ支流）流域地方、全シベリア地方とはおそらくチュメニ地方のこと。

3) マナセはユダの王。父ヒゼキヤとは逆に悪政を行った。（列王紀下21章及び歴代志下33章を参照）イヴァンが自己の罪をマナセのそれにまさると告白しながら、宗教的罪についてはその限りでないと言わねば断っているのは、マナセが父の宗教改革を覆して偶像崇拜を復活し、ために神の罰をうけたからである。

4) ルカ15：7。

「迷える」子羊や「失われた」ドラクマ銀貨に関する譬話も同様のことを教える⁵⁾。たとえわたしの不法が浜の真砂の数にまさるものであったとしても、わたしは憐れみ深き神の慈悲に信頼を寄せている。神はその慈悲深きことにおいてわが不法を呑みつくすことができるからだ。現に神は今日、罪人、姦通者、迫害者であるわたしを、その昔アマレク⁶⁾とマクセンティウス⁷⁾を打たれた生命を与える十字架により、憐れまれたのである。この十字架を描いた進撃の旗はいかなる軍事知識をも無用にしてしまう。このことはルーシのみならず、ドイツ人、リトワ〔人〕、タタール人その他多くの国民が知っている。汝自ら彼らに尋ね聞き出すがよい。わたしは「われらが征服したのが」いかなる民族であったか、その名を記そうとは思わない。なぜならそれはわたしの勝利ではなく、神の勝利であったからだ。汝には数多くあるなかから一部だけを思い出してもらおう。というのも汝がわたしに書いてきたあらゆる侮辱について、わたしは以前汝に詳しく真実を記しておいたからだ。それゆえ今は多数のなかから一部のみを思い出してもらおう。そこでヨブ記のなかで「わたしは地をめぐり、天の下を歩き回っている」⁸⁾とされていることを思い出すべきだ。これと同様に汝らもシリヴェーストル司祭、アレクセイ・アダーシェフ及び己が一族全員とともに、全ルーシの地を己の足下に見ようと欲した。だが神は自ら望み給う者に権力を与えられるのである。

汝の記すところによれば、わたしの理性は異邦人の間にすら見られないほどに墮落しているという⁹⁾。よろしい。それならばわたしは汝をわたしと〔汝と〕

5) ルカ15：3—6，8—9。

6) アマレクびとはモーセの率いるイスラエルびとに敵対した部族（出エジプト17：8—16）。

7) マクセンティウスはローマ皇帝（在位306—312）。西の正帝マクシミアヌスの子。西方の単独支配権をかけてコンスタンティヌス帝と争うが、312年ローマ近郊で敗れる。伝説によればコンスタンティヌスの前方の空に輝く十字架が現われ、「これにて勝て」と記されていたという。この後コンスタンティヌスはキリスト教をうけ入れる。

8) ヨブ記1：7のサタンの言。

9) イヴァンはこう記すが、クールプスキーのイヴァン批判は「汝の良心は癩病におかされており、神を知らぬ異邦人の間にも見られぬほどだ」となっていた。（傍点は

の間の裁き手に任じよう。[どうか判断してもらいたい。] はたして汝らが墮落しているのか、それともわたしなのか。わたしは汝らを支配しようと望んだ。汝らはわが支配に服することを望まなかった。そこでわたしは汝らに怒りを発した。墮落しているのは汝らの方ではないだろうか。汝らはわたしに服従し、従順であろうとしなかつただけではない。わたしを支配し、わが全権力を奪い、自ら思うがままに国家に君臨し、わたしから国家を奪取したのである。手短に言えば、わたしは君主でありながら、現実には何ら支配してはいなかった。わたしは汝らからどれほど攻撃されたことだろう。わたしがうけた侮辱と屈辱と中傷はいかに多かつただろう。それには何か理由があつたのだろうか。一体汝らにたいするわが罪とはそもそも何であつたのだろうか。誰を何によって辱しめたというのか。はたしてわたしに何の罪があつてプロゾロフスキーの150チェチが[汝らにとってわが]子フォードルよりも貴重であつたのか¹⁰⁾。よく思い出して考えてみるがよい。汝らはシツキーとプロゾロフスキーらの件を裁くにあたって、いかにわたしを非難したのであつたか。わたしを悪人ででもあるかのように詰問したのではなかつたか！それともあの土地はわれらの生命より貴いというのであろうか。一体プロゾロフスキーの輩がわれらにとって何だというのだろうか。われらが彼らの足下に服さねばならぬという道理はあるまい。¹¹⁾ 事実、わが父の下には百人を下らぬプロゾロフスキーの如き輩が仕えていたの

栗生沢。本稿（Ⅰ）—116頁）もつとも「（イヴァンの）理性が墮落している」という表現はリトワの大ゲトマン、グリゴリー・ホトケーヴィチのM. И. ヴォロティンスキー公宛て書簡（1567年）にあつたと考えられる。というのもヴォロティンスキー公のホトケーヴィチへの返書（1567年。その実の著者はイヴァン雷帝自身であつたと考えられる）のなかに、それへの言及があるからである。（Послания Ивана Грозного, стр. 266）かつてホトケーヴィチが用いたこの表現を、後にクールプスキーへの返書（今問題にしている書簡）のなかでイヴァンが使用していることから、ルリエーは、イヴァンがホトケーヴィチの書簡の真の著者をクールプスキーだと考えていたのではないかと推測している。

10) 本稿（Ⅱ）—107頁注（18）を参照。チェチは地積単位（0.5ヘクタール強）。

11) 原文 Ино то уж мы в ногу их не суды。は意味不明。ここではシュテーリンとフェネルに近い解釈をとるが、現代ロシア語訳者はこれを17世紀のテキストにおける何らかの欠損とみて、訳出を断念している。

である。そして神の恩寵といとも浄き聖母の憐れみ、大いなる奇跡行使者らの祈りとセルギー¹²⁾の憐れみ、またわが父の祝福によって、わたしの場合にも同様であった。またクルリャーチェフは何ゆえわたしに優るのだろうか。彼の娘らにありとあらゆる装身具を買い与えるがよい。結構なことだ。素晴らしい。だがわが娘らには魂の平安のために呪いがかけられた¹³⁾。そう、これに類したことは山ほどある。わたしが汝らから蒙った災難をすべて列挙することはできないほどだ。

また汝らは何ゆえわたしから妻を引き離したのか。もし汝らがわが若き妃を奪い取ることがなかったら、クロノスの犠牲もなかったであろう¹⁴⁾。汝は言うかもしれない。わたしがそれに耐えられず、独身を守り通さなかったと。だが

12) 聖セルギー・ラドニェシュキー (1314頃—1392) のこと。

13) イヴァンのこの記述から判断するならば、クルリャーチェフの娘たち (二人あり、のちクルリャーチェフ自身とともに出家せしめられた。クルリャーチェフについては本稿 (Ⅱ) —103頁, 注 (9) 参照) はシリヴェーストル, アダーシェフ, クールプスキーらから何らかの好意を得ていたらしいが, 具体的には不明。クールプスキー自身もこの点に関しては, 第三書簡で「装身具……が何のことなのか理解できない」と記すのみで説明しようとしていない。(後述72頁参照) イヴァンには娘が三人いた (アンナ, マリヤ, エウドキア) が, 皆幼くして亡くなっている。

14) イヴァンはここで妃アナスターシア・ロマーノヴナの死 (1560年, 当時30歳になるかならぬ位であった) の責任をクールプスキーらのグループに帰している。だがこれがいかなる意味で言われているかは必ずしも明らかでない。確かにクールプスキーが『歴史』において記すところによれば, 「悪しき追従屋ども」がイヴァンに, シリヴェーストルとアダーシェフの両名がアナスターシアに魔法をかけた, と吹き込み, これをイヴァンが信じた, という。またウストリャーロフの伝えるところによれば, イヴァンは1572年にリトワの使者に, 皇妃の死の責任は貴族らにあると述べたという。しかもクールプスキーへの第一書簡において, イヴァンはクールプスキーらが皇妃を憎んでいたと記している (本稿 (Ⅱ) —107, 108, 135頁)。だが公式年代記は言うまでもなく, イヴァンの上の第一書簡においてすら, アナスターシアの殺害については何も述べられていない。それゆえここでのクールプスキー・グループにたいする批判は, 彼らが直接皇妃を殺害したということにではなく, 間接的に関与したという点に向けられていた, と考えるべきであるようにみえる。クールプスキーによるクロノスへの言及は本稿 (Ⅰ) —119頁を参照。これにたいしイヴァンはその第一書簡で「理性を有すツァーリたるわれらが道はずれ」るはずがない, と答えている (本稿 (Ⅱ) —138頁)。ここでいう「クロノスの犠牲」が何をさしているのかは不明であるが, フェンネルやルリエーはイヴァンによる (オプリーチニナ期の) 貴族弾圧と考えている。

われらは皆人間なのだ¹⁵⁾。汝こそなにゆえ銃兵の妻を奪ったのか¹⁶⁾。もし汝らが司祭と共謀してわたしに反抗しなかったなら、こうしたことは何も起らなかったであろう。万事は汝らの不服従ゆえに起ったのだ。汝らはまた何ゆえにウラジーミル公を帝位につけ、わたしを子供らとともに追放しようと望んだのか¹⁷⁾。わたしが篡奪や戦闘によって、あるいは流血の果てに国家に君臨するにいたったというのであろうか。そうではない。われらは神の恩寵により、生れながらにしてツァーリである。わたしは父がいかにしてわたしを祝福し、国家を譲り渡してくれたのか憶えてはいない。われらは玉座の上で成長したのである。それなのになぜウラジーミル公が帝位につかなければならなかったのだろう。彼は第四の分領公家の出にすぎない¹⁸⁾。一体彼に帝位にふさわしいいかなる資格があるのだろう。彼にどんな血統があるというのか。あるのは彼にたいする汝らの内通と彼自身の愚かさ¹⁹⁾だけではないか。彼にたいするわたしの罪とは一体何なのであろう。何ゆえ汝らの叔父や主人たちは彼の父を牢獄内で殺害し、彼と彼の母を牢獄に閉じこめたのだろう。彼とその母を解き放ち、彼らに名誉と平安を与えたのは他ならぬこのわたしであった²⁰⁾。だが彼はわが好意を無に

15) イヴァンの不身持については年代記が「皇妃アナスターシアが身罷ると、ツァーリは狂暴になり、淫行に走り始めた」と記している。またその後イヴァンは再婚を重ね、生涯に七度妻をむかえたと言われている。(1577年時点では6度目であった。)クールプスキーが以前実際にこのような非難をしたのかどうかは分からないが、後の書簡(「クールプスキー第三書簡」)では雷帝の淫行を厳しく非難している。(後述89頁参照)

16) クールプスキーの生涯における何らかの恋愛事件にたいする言及であろう。もっともクールプスキー自身はのちにこれを一蹴し、「それらはまるでお笑い草……答える必要もあるまい」と述べている。(後述72頁参照)。

17) イヴァンはこの件にすでに何度か触れている。本稿(Ⅰ) —134, 146頁, (Ⅱ) —105—106を参照。

18) ウラジーミル・スタリツキー公の父アンドレイ・イヴァノヴィチ公はイヴァン三世の五男、すなわちモスクワ大公家の第四の分領公家(スタリツキー公家)の祖ということになる。

19) イヴァンはここでウラジーミル公の「愚かさ」 дурачности に言及するが、その意味は十分に明らかではない。少なくともここから後者が知能の低い人物であったと直截に結論づけることはできない。ただし後にクールプスキーがその第三書簡で、ウラジーミルを帝位にふさわしい人物ではないと語っていることも看過できないのではあるが(後述70頁参照)。

した。わたしはこの屈辱を耐えることができなかった。それゆえわたしは自衛のために立ちあがった。汝らもさらに激しくわたしに反抗し、裏切りを始めた。そこでわたしは一層厳しく汝らに立ちむかった。わたしは汝らをわが意向に服従せしめようと望んだ。だが汝らは逆に、いかに主の聖物を汚し、冒瀆したことであろう！汝らは人間に怒りを向けながら、神に楯突いている。いかに多くの教会、修道院、聖所を汝らは冒瀆し、汚したことだろう！²¹⁾汝らは自らこのことで神に申し開きをしなければならぬ。だがこれについても口を噤もう。今は現在の事柄について汝に書こうと思う。ああ公よ、神の御旨を弁えよ。神は自ら望み給う者に権力を与えられるのだ。だが汝らはシリヴェーストル司祭やアレクセイ・アダーシェフとともに、奢れるヨブ記のサタンと同じことを言ったのである。すなわちサタンはこう言った。「わたしは地をめぐり、天の下を歩き回った。そして天の下の全地を足下に従えた。」²²⁾（こう言ったサタンに主は「汝はわが僕ヨブを知っているか」と尋ねられたのである。）同様に汝らも

20) ウラジーミル公の父（アンドレイ・スタリツキー公）は1537年イヴァン雷帝の母エレナ・グリンスカヤ摂政の命で捕えられ、獄死した。このときウラジーミル公（生後2歳）と母エウフロシーニヤも投獄されたが、雷帝はこれらをクールプスキーらの「叔父や主人たち」 ваши дяди и господины の仕業と述べている。母エレナ存命期にも大公権が有力者らにより蔑ろにされていたと考えていたのであろうか。ベーリスキー家支配下の1541年末ウラジーミル公とその母は釈放され、スタリツキー分領が彼らに返還された。イヴァンはこれを自分の善政と考えている。彼はクールプスキー宛て第一書簡において（本稿（I）—153頁）、自分が長ずるにつれて次第に自立し、1540年夏（10歳のとき）にはИ. В. シューイスキー公を遠ざけ、代りにИ. Ф. ベーリスキー公を側近に任命した、と言っている。すなわち、ウラジーミル公を釈放したベーリスキー政府を任命したのは10歳の自分であるから、上の釈放は自分の善政だと考えているのである。イヴァンとウラジーミル・スタリツキー公のその後の関係はすでに何度も記された如く、またこの後の本文に述べられている通りである。具体的に記すと1553年事件の後10年してウラジーミルは最終的にツァーリの失寵を蒙り、1566年事実上全分領が没収され、1569年妻と幼い子供たちとともに処刑されている。

21) クールプスキーが教会…を冒瀆したという記述が具体的な意味をもっているのかどうか分らない。むしろ第一書簡で述べていたことの単なる繰りかえしのように見える（本稿（I）—122頁）。

22) 本書簡への注（8）と同じくヨブ記1：7におけるサタンの言。もっとも後半の文章は聖書にはない。

ルーシ全土を足下に従えようと考えた。だが汝らの知恵はすべて神の御心により空しくされた。それゆえに汝にたいするわれらの筆鋒も鋭くなったのである。かつて汝らはこう述べた。「ルーシには人物はいない。断乎立つ者はいない」と²³⁾。実際今や汝らはいない。では今は誰がドイツの堅固な町々を奪うのか。アマレクとマクセンティウスを破った生命を与える十字架の力が町々を奪うのである。ドイツの町々は戦場の轟きを待つのではなく、生命を与える十字架の出現を待って己が頭を下げる。ただ〔われらの〕罪ゆえに、偶然に生命を与える十字架が出現しなかった場合にのみ、戦闘が行われた。多くのあらゆる者〔捕虜〕たちが解き放たれた。彼らに問うて確かめるがよい²⁴⁾。

また汝が腹立たしげに記すところによると、われらは憤りのあまり汝を最果ての町々に派わしたという。だが今やわれらは白髪の老境に入りながらも²⁵⁾、神の思召しにより汝の最果ての町々を越えて、さらに遠くへ進出した。われらはわが馬を駆って、汝らが通ったすべての道をリトワからまたリトワへと通り、徒歩で行軍し、この地のあらゆる所で水を飲んだ。それゆえ今やリトワにおいても、わが〔軍〕馬があらゆる地に姿を現わすはずはない、と安心するわけにはゆかないのだ。また汝がすべての労苦から解放されて平安を得んと望んだ地、すなわち汝の安住の地ヴォルメルにも、神はわれらを導かれたのである。汝が希望に燃えて逃げ去ったその地で、われらは神の思召しにより汝に追いついた。かくて汝はさらに遠くへと旅することとなったわけだ²⁶⁾。

23) クールプスキーの書簡には見えない。彼のイヴァンあて第一書簡にみえる「イスラエルの強者」に関する記述をイヴァンが言いかえたのかもしれない。

24) ここは1577年のリヴォニア遠征の際、ほとんどの町が自ら降伏してきたことを神の恩寵（十字架の出現）で説明していると考えられる。ツァーリの軍が抵抗をうけたのは、たとえばヴェンデン（ケシ）市の場合である。それは激戦の末突撃によって奪取され、守備兵は降服を拒んで自爆した。

25) イヴァンはこの時47歳。

26) ここでイヴァンは1577年の遠征の成果を誇示し、「最果ての町」で苦勞したというクールプスキーの言（本稿（Ⅰ）—118頁）を皮肉り、さらに裏切者には「安住の地」などないことを示そうとしている。だがクールプスキーはヴォルメルから書簡を書き送りはしたが、ここに住んでいた（「安住の地」であった）ことはなかった。また1577年のロシア軍の遠征の際にも彼はヴォルメルには居なかったと考えられる根拠がある。

以上数多くのなかからほんの一部のみを記した。汝自らが、一体何をどのよ
うに、また何ゆえに行ったのかをよく考えてみるがよい。われらに対する神の
御旨と恩寵の深さを思ってみるがよい。汝が行ったことをよく考えてみよ。こ
れらのことをよく自省し、すべてを自らに納得させるがよい。以上のすべてを
われらは汝に、高慢にもならず、驕り高ぶりもせず書いた。それは神が御存
知である。ただ汝に回心の必要なことを思い起させ、汝が己の霊の救いに思い
をいたすようにと願って書いたのである。

わが世襲領リヴォニアの地の町ヴォルメルにて、7086年、わが治世の第43年、
ロシア帝位在位の第31年、カザン帝位在位の第25年、アストラハン帝位在位の
第24年に記す²⁷⁾。

(V) クールプスキーがイヴァン雷帝に宛てた第三の書簡

コーヴェリの公、賤しきアンドレイ・クールプスキーの¹⁾モスクワの偉大な
るツァーリの第二の書状にたいする返書²⁾

27) 本書簡は1577年9月初頭に執筆されたと考えられる。本文にある如く世界開闢紀元
7086年(の初頭)である。イヴァンが父の死とともに即位したのは1533年12月(す
なわち7042年)で、書簡執筆時は44年目にあたる。ツァーリとして即位したのは
1547年1月(7055年)で、31年目、カザン征討は1552年10月(7061年)で、25年目、
さらにアストラハン征服は1556年(7064年)で22年目である。従ってここにおける
計算(数字)(「わが治世の第43年」と「アストラハン帝位在位の第24年」)は正確
ではない。だがこれをキーナンの如く、誤りと断定する必要は必ずしもない。という
のも、ツァーリとしての即位年度やアストラハン征服年度は当時の諸文書で必ずし
も統一した年度が与えられていないからである。たとえばイヴァンのツァーリとし
ての即位年を7054年とする文書も多いし、アストラハンについては7062年(1564)
の遠征とデルビシーアレイ汗のイヴァンによる任命をもって征服の時とみる見方
もあったのである。(他に7063年とする文書もある。)同様のことはカザン征討年
についても言える。つまり諸文書における上記の件に関する年代記述は極めて大雑
把であったのである。

- 1) 1567年クールプスキーはポーランド王ジクムント二世アウグストにたいする勤務を
認められてコーヴェルを下賜された。
- 2) 本書簡はすでに記した如く(本稿(I)一109, 111頁)最終的には1579年9月15日
に書きあげられた。

汝による迫害のため流離^{さすらい}と貧困の最中にあるわたしは、[返書を認めるにあたって] 汝のいとも立派な長々と続く称号を記そうとは思わない。賤しき者が偉大なるツァーリたる汝にそのようなことをする必要もなからう。かくの如く 颯々と続く称号を記すのは、おそらくツァーリからツァーリに呼びかけるときにこそふさわしい。汝はわたしに、あたかも一人の司祭にたいするかのよう、順を追って告白を行った。だが軍務につく一介の庶民にすぎぬわたしは、これを耳の端で聴く資格すらない。何よりもわたし自身が数え切れぬほど多くの罪^{とりに}の囚人となっているからだ。それにもかかわらず、もし汝の悔い改めが旧約聖書におけるマナセのそれのように真実のものであったなら、かつて汝の忠実な僕であったわたしは言うまでもなく、キリスト教徒のすべての皇帝や国民もこれを喜び、大いに祝うべきであろう。というのもマナセは血に飢えた殺戮と不正の数々を悔い改め、その死にいたるまで主の法にあって柔和に正しく生き、もはや何びとをも少しも辱しめることがなかった、と言われているからである³⁾。また新約聖書においても、自ら損害を与えた者にたいし四倍にして返済したザアカイの悔い改めが高く称賛されている⁴⁾。

もし汝の悔い改めが、汝自身聖書から選び、旧新約聖書から引用している聖なる事例に適うものであったなら、何とよかっただろう！だが引続いて汝の書簡に記されていることは、これに適うものでないばかりか、驚愕すべきであり、不可思議ですらある。それは汝の内なる人が、両足が萎えて不恰好な歩みをする者のように、不完全であることを示している。いわんや世俗の哲学は言うに及ばず、聖なる書物にも精通する人びとの多い汝の敵の国々においては⁵⁾、[それはなおのこと驚愕の対象となっている。] 汝は極度に卑下したり、逆に異常にまた度を越して高ぶっているのだ！主は弟子たちにこう述べられた。「たえすすべての戒律を守ったとしても、わたしどもは役に立たない僕ですと

3) マナセについては上述55頁注(3)を参照。彼は神の罰をうけた(アッシリア軍の捕虜となった)後、悔い改めた。

4) ルカ19:2以下。

5) クールプスキー第二書簡最初の段落の末尾を想起させる文章である。「汝の敵の国々」とは何よりもまずリトワであり、ポーランドである。

言いなさい。』⁶⁾これにたいし悪魔はわれら罪人に、口先だけで改悛し、心のなかでは己を偉大で栄光ある聖人がたと並ぶ存在だと考えるよう唆す。主は最後の審判に先立って何びとも裁くことのないよう、またまず自分の目から梁を取り除いてから、兄弟の目のちりをとりだすように命じられる⁷⁾。他方悪魔は、羊の鳴き声のように意味不明のことを喋って、懺悔したかのように見せかけ、実際にはそうせずただただ威張りちらし、無数の不法行為と流血とを誇るようにと唆す。そしてすぐれた聖人がたを呪うだけでなく、悪魔と呼ぶよう教えるのである。これは往古のユダヤ人がキリストを偽り者また悪霊につかれた者と呼び、悪鬼を追い出した悪魔の頭目ベルゼブルとみなしたのと同様である⁸⁾。同じことは汝、陛下の書簡にもみられる。汝は義人や聖人を悪魔と呼び、悪霊に導かれる者を恥知らずにも神の霊に導かれる者とみなしている。かくて汝は、「誰でも聖霊によるのでなければ、イエスを主と呼ぶことはない」と言った大いなる使徒 [の言葉]⁹⁾を否認したのである。誰でも信仰正しきキリスト教徒を誘^{そし}る者は、彼を誘^{そし}るのではなく、彼のうちに宿る聖霊を誘^{そし}るのである。このようにして彼は癒しがたき罪を己の頭の上にかぶることになる。「誰でも聖霊を誘^{そし}るものはこの世でも来たるべき世でも許されることはない」と主が語るとおりである¹⁰⁾。

だがそれだけではない。汝は己が懺悔聴問僧¹¹⁾に意見をし、中傷¹²⁾を加えている。これほどに忌むべき、醜悪なことがあるだろうか。彼は汝ツァーリの霊を悔い改めに導き、汝の罪を己が首に負い、汝を公然たる汚れから清き姿のままに引き出し、悔い改めゆえに汝を浄めてわれらの神なるいとも浄きツァーリ、

6) ルカ17:10。

7) マタイ7:1-4, ルカ6:41-42。

8) マタイ27:63, 12:24, ヨハネ10:20。

9) Iコリント12:3のパウロの言葉。

10) マタイ12:32, マルコ3:29。

11) シリヴェーストル司祭のこと。

12) сикованций на него умышляти. は現代ロシア語訳にある如く、「苦しみにあわす」ではなく、悪しき告発をする、中傷する、非難するといった意味のように思われる。сикованция はギリシア語の σικωφαντία をそのまま用いたもの。後にも一度出てくる。後述74頁(「非難の矢」)。

キリストの前に立たせたのではなかったか！それなのに汝は故人となった者にもこのような仕打をするのだろうか。何と奇妙なことだろう！汝らの邪で狡猾^{よしま}きわまりない偏執狂の心に燃えあがる悪意は、聖なる尊師がたの死後も、彼らにたいし消え去ることがないのだ！ああツァーリよ、汝は裸の父を見て笑ったハムの話¹³⁾を恐ろしく思わないのであろうか。このことで彼の子孫にいかなる呪いがかかったことであろう！もし肉の父についてすらこう言われているとするならば、ましてや霊の父にたいしては〔その弱さに〕覆いをかけてやるべきである。たとえ人間的弱さのゆえに何事かが起ったとしても、また汝の追従者らがかの司祭を中傷し、彼は人を欺く偽りの幻像によって汝を脅そうとした、と言ったとしてもである。ああわたしは本当のことを語ろう。彼は確かに偽り者、狡猾また巧妙であった。というのも彼は策略を用いて汝を捕え、汝を悪魔の罠と心中の獅子の口から救い出し、われらの神キリストの許へと導いたからである。実際賢明な医者ならば同様に行うだろう。彼は健康な肉を傷つけたとしても、肉腫や治療不能な壊疽を剃刀で切り取り、その後徐々に傷口を埋めて病人を癒すのである。かの祝福されしシリヴェーストル司祭も、長年にわたって慢性化し治りにくくなった汝の心の病を見たとき、同様に行ったのである。賢人たちもこう述べている。「人の心の悪習は年がたつにつれて頑固となり、その人の本性となってしまう。するともう治すこともできなくなる。」¹⁴⁾かの尊師も同様に、汝の病の癒しがたいのを見て、膏薬を用いた。すなわちあるときは刺すような言葉で汝を非難、叱責し、汝の忌むべき習性を、厳罰を与えることによって剃刀で切るように断ち切ろうとした。彼はおそらく預言者の次の言葉を思い起したのだろう。「実際、敵の愛想のよい接吻より、友人からうける傷の方がましである。」¹⁵⁾だが汝はこれを思い出さなかったか、忘れてしまった。そして邪で狡猾な者どもに惑わされて彼を追放し、それとともにわれらのキリストをも追い払ったのだ。また別のときには彼は轡^{くつわ}をしっかりと抑え、汝の放

13) 創世紀 9 : 18以下。

14) 出典不明。

15) 箴言 27 : 6 を参照。

縦と並外れた情欲と怒りとを抑制しようとした。彼にはソロモンの次の言葉が成就した。「義人を教えなさい。彼は感謝の念をもってそれを受けいれようとするだろう。」さらにこうも言われている。「義人を責めなさい。彼は汝を愛するようになるだろう。」¹⁶⁾これに続く文章については何も言うまい。汝ツァーリの良心にそれを委ねよう。わたしは汝が聖書に通じていることを知っているからだ。加うるに、高貴なツァーリたる汝を刺すような言葉をもって過度に責めたてることのないように、賤しき身のわたしは抑制のきく人間として、罵り合いを控えることにする。われら戦士にとって、奴隷の如く罵り合うのはあまりにも恥すべきことだからだ。

汝はまた思い出すことができよう。かつて汝が信仰正しくあったとき、汝の統治は神の恵みと聖人がたの祈り、また汝のすぐれたシンクリート議員たちのイブランスイッヴェート選抜会議の活動により、思う通りにいっていた。ところがその後、邪で狡猾な追従者や汝〔の霊〕と己が祖国を破壊する者どもが汝を誘惑するにいたったとき、何がどのようになったのか、神によりいかなる不幸が放たれたのであったか。わたしが言おう¹⁷⁾。飢餓、悪疫の矢、続いて蛮族どもの剣、神の法の復讐者、栄えある町モスクワの突然の火災、ロシア全土の荒廃、そして何よりも苦々しく恥すべきことに、ツァーリの霊の墮落と以前には勇敢であったツァーリ〔の軍勢〕の敵前逃亡である。当地には当時タタールの襲撃のあった際に、汝と汝の特別クロメーシニキ隊員¹⁸⁾らが逃亡して森に身をひそめ、すんでのことで餓死するところであっ

16) 以上の引用は箴言9：8－9より。

17) 以下にクールプスキーはオプリーチニナ期のロシアを襲った様々な災害を列挙している。(詳しくは Зимин, Опричнина, 389-408 を参照) もっとも衝撃的かつ破壊的であったのは1571年5月のクリミア汗デヴレト・ギレイのモスクワ急襲とモスクワ炎上である。これは Я.ヴォルィンスキー麾下のオプリーチニキ部隊が敗北を喫した後、イヴァンとオプリーチニキ軍が北方へ退却し、クリミア軍との戦闘を回避したことの結果であった。もっともこれをイヴァン個人の臆病とみなしうるかどうかは微妙である。当時彼の下には十分な兵が居なかったし、デヴレト・ギレイが退却したという誤報もあったからである。

18) кромешники はオプリーチニキのこと。кроме は опричь と同義で、～の外の(に)、～を除いた、を原義とする。この語は通常 ад (地獄) や тьма (闇) を想起させる語で、そこからオプリーチニキ(クロメーシニキ)は地獄(黄泉)の軍隊というニュアンスをおびてくる。ちなみにオプリーチニナは元来寡婦に割当て

た！とわれらに言ってくるものがある。だがこのイシマエルの末裔の犬¹⁹⁾は、以前汝が神の御旨のままに生きていたときには、汝のもっとも小さな僕であるわれらの前に、荒野を逃げまどい、安らぎの場所を見出すことがなかった。今日汝が〔彼らに〕支払っている重くて莫大な貢納——汝はそれによりキリスト教徒の血を贖おうとしている²⁰⁾——の代りに、当時は汝の戦士たるわれらのサーベルがイスラム教徒の頭上に振りおろされたのであった。貢納はこのような方法で支払われていたのである。

汝はまた、われらが汝に強要されて不承不承十字架に接吻したことのゆえにわれらを裏切者と呼んでいる。だが汝らの下では誰であろうと宣誓を拒絶した場合には、もっとも苦き死により罰せられるのが習いである。だからわたしは汝に次のように答えよう。誰でも意志に反して約束し、また誓ったとするならば、罪は十字架に接吻した者にではなく、それを強要した者にある。たとえ迫害が加えられなかったとしてもである。これについてはどの賢人も一致している。というのもし残酷きわまりない迫害にもかかわらず逃げなかったとするならば、彼はあたかも自分で自分を殺すことになり、主の言葉に反することになるからである。すなわち主は言われる。「もし一つの町で迫害されたなら、別の町へ逃げなさい。」²¹⁾これについてはわれらの神、主なるキリスト御自身が忠実な弟子たちに範を示された。彼は死のみならず、神に敵対するユダヤ人の悪意からも逃れようとしたのであった。²²⁾

られた所領をさしたが、イヴァンはこれを通常の国土から「切り離された特別領」の意味で用いた。だがクールプスキーはこれもおそらく上述の如きニュアンスで理解したものと思われる。（もっともクールプスキーはオプリーチニナという語自体は用いてはいない。）

- 19) イシマエルとはアブラハムがエジプトの女ハガルに生ませた子（創世紀16：15）。その末裔の犬とは一般的にイスラム教徒であるが、ここではクリミア汗デヴレト・ギレイのこと。
- 20) ここはイヴァンが金でクリミア汗の攻撃の矛先をかわそうとしていることを批判したものと考えるべきであるように思われる。コ布林はポーランド・リトワ国家とクリミアの対ルーシ同盟のことが問題になっていると考えるが、説得的ではない。
- 21) マタイ10：23。
- 22) ヨハネ8：59, 10：39。

汝はまたわたしが人間に怒りを発し、実は神を攻撃したかのように、すなわち神の教会を荒らし、焼き払ったかのように書いているが、これについても次のように答えよう。ツァーリよ、われらを理由もなく中傷することを止めるか、あるいは汝の言葉を撤回していただきたい。ダビデですらサウルの迫害のゆえに、異教徒の王とともにイスラエルの地に戦いを挑むことを余儀なくされたのである²³⁾。これにたいしわたしは異教徒の王ではなく、キリスト教徒の王ら²⁴⁾の命令を果たしたのであり、彼らの命令によって進軍したのである。それにもかかわらずここでわが罪を告白せねばなるまい。わたしは汝の命令によって大いなるヴィテプスクの地とその24のキリスト教会を焼き払うことを余儀なくされた²⁵⁾。同様にわたしはルツク地方を戦場にしなければならなかったが、これはジクムント・アウグスト王の命令によるものであった。われらはこの地方においてもコレツキー公とともに、不信仰者が神の教会を焼いたり荒したりすることのないように厳しく監視した。だが実際にはわが軍の余りの多さゆえに、われらは十分に監視することができなかった。当時わが軍には15,000人が居たからである。なかには蛮族イシマエルの末裔や他の異端たち、往古の異端の復興者、キリストの十字架の敵どもが少なからず混じっていた。彼ら不信仰者どもはわれらの知らぬ間に、それもわれらの出立後、密かにある教会に忍び込んで火を放ち、修道院とともに焼き払ったのであった²⁶⁾。これについてはわれ

23) サムエル記上27—29章。ダビデはペリシテ人と共にイスラエルと戦おうとした。

24) キリスト教徒の王らというのは、以下にも記されるごとくまず最初はイヴァン自身であり、亡命後はジクムント王ついでステファン・バトラー王のことであろう。

25) 1560年のリヴォニア遠征(本稿(Ⅱ) 120—121頁参照)の成功により、クールプスキーはヴェリーキエ・ルーキの軍司令官に任命された。彼はそこから1562年ヴィテプスク攻撃に向かった。

26) これはクールプスキーが亡命後間もなく参加したリトワのゲトマン N. ラジヴィウが率いる1564年9—10月のポロツク及びヴェリーキエ・ルーキへの遠征のことであろう。それにはbogshu・コレツキー公も加わっていた。(フェンネルやシュテーリンは1565年春の遠征のことと考えている。だがここでは Переписка, 409. прим. 17 のコプリンの説に従う。さらに Зимин, Опричнина. 124, 138 を参照。) 本文のルツク地方はヴェリーキエ・ルーキ地方のことであろう。イシマエルの末裔はクリミア・タタール軍のこと。「異端たち」とはおそらく、ポーランド人(カトリック教徒)や新教徒のことを正教徒であり続けたクールプスキーの立場か

らが解放した捕虜の僧侶たちが証言してくれんことを！その後一年ほどして、汝の主要な敵であるペレコープのツァーリが、王とわれらの許に使者を遣わし、ルーシの汝の支配地域に彼とともに攻め入るよう懇願してきた²⁷⁾。王はわたしに進発するよう命じた。だがわたしはこれを拒絶した。わたしは外国の不信心なツァーリと同盟して、イスラムの旗の下にキリスト教徒の地に進軍するなどという馬鹿げた行動を考えることすら潔よしとしなかった。後に王自らがこれに感心し、わたしを称賛した。それ以前にこのような行動に走った愚か者らとわたしが一線を画したからである。

汝はさらに、先に述べた者らがわたしとともに汝の妃に魔法をかけ、汝を妃から引き離したかのように書いている。わたしは汝の前にこれらの聖人がたを弁護しようとは思わない。なぜなら事実がラッパにまさる大声で彼らの神聖さと善行について証言しているからである。それゆえわたしは自身についてのみ手短かに答えよう。確かにわたしは甚だ罪深く価値なき存在である。だがわたしはスモレンスク大公フォードル・ロスチスラヴィチの一族に連なる高貴な家柄に生まれた²⁸⁾。これはツァーリ陛下もルーシの諸年代記からよく知っておられるところである。ところでこの一族の諸公には己自身の肉を食べたり、己が兄弟の血を飲んだりする習慣はない。他方若干の諸公にとってはそれは昔からの習慣であった。最初これを行ったのはモスクワのユーリーである。彼はオルダーにおいてトヴェーリ大公聖ミハイールにたいしてこれを行った²⁹⁾。その

ら表現したものであろう。「往古の異端の復興者」その他は具体的には分らない。

27) ペレコープのツァーリとはクリミア汗、デヴレト・ギレイのこと。この頃クリミア軍を味方につけるとポーランド、ルーシ（モスクワ）両国は激しい外交戦をくりひろげていた。クールプスキーがここで記すのもそうした外交戦の一環であったのだろう。ここで問題となっているのは、1565年秋のクリミア軍のルーシ侵入であろう。このときのクリミア軍はボルホフ付近（オリョール北方）で撃退されている。

28) 本稿（Ⅰ）—118頁，注（10），また同147頁，注（107），（108），（109）を参照。

29) 以下にクールプスキーはモスクワ公家が昔から血に飢えた一族であることを論証しようとする。ユーリー・ダニーロヴィチ（モスクワ大公1303—25。ウラジーミル大公1319—22）はライバルのトヴェーリ大公ミハイール（1285—1319，ウラジーミル大公1305—17）を、彼（ユーリー）の妻を殺害した廉で金帳汗ウズベクに訴えた。ユーリーの妻はウズベクの娘コンチャカであった。ウズベクはユーリーの眼前でミハイールを処刑した。ミハイールは後にロシア正教会により列聖された。オルダー

後の者たちのことはまだ記憶に新しいし、目の前に鮮やかに浮かんでくる。ウグリチ諸公やヤロスラフ公の子孫また他の同族諸公らにたいしどのような仕打がなされたことであろう。彼ら一族はいかにして平定され、根絶されたのであったか³⁰⁾。それは耳にするだけでも辛く、おぞましいことであった！永遠に祝福され、神の冠をうけた今は亡きかの孫も、母親の乳首から引き離され、暗き牢獄に閉じこめられて、何年もの間責め苦しめられたのであった！³¹⁾

ところで汝のお妃はこの賤しきわたしの近親者であられる。この縁戚関係を汝は本紙葉の欄外に見ることができよう³²⁾。

汝はまた己が兄弟ウラジーミル³³⁾のことを想起し、あたかもわれらが彼を帝位に即けんと欲したかのように書いている。わたしは本当のところ、そうは考えなかった。というのは彼はそれにふさわしい人物ではなかったからだ。すでに汝がわが妹をわたしから無理矢理に奪い、汝の兄弟に嫁がせたときにわたしは将来汝がわたしに何を企んでいるのかを推測することができた。彼女は、古

とは金帳汗国のこと。

30) ウグリチ諸公というのは、1491年イヴァン三世により逮捕投獄され、二年後に獄死したイヴァンの弟アンドレイ（大）・ウグリツキー公のこと（本稿（I）—147頁，注（106）を参照）。（もっともここで「諸公」と複数になっている理由は不明である。）ヤロスラフ公の子孫というのは、ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ公の子孫のことであろう。（ヤロスラフ公はモスクワのイヴァン一世の曾孫。父はクリコヴォ戦の英雄ウラジーミル・アンドレーエヴィチ勇敢公。）ヤロスラフの子ヴァシーリー（セルプーホフ・ポロフスク公）はヴァシーリー二世盲目公の忠実な同盟者であったが、1456年逮捕され（原因は不明）、1483年鎖につながれたまま死去した。彼の妻と息子はリトワへ亡命した。

31) 「今は亡きかの孫」はイヴァン三世の孫ドミートリー公のこと。彼については本稿（I）—147頁，注（107）を参照。

32) シュテーリン及びフェンネルによると本書簡の大多数の写本ではこの箇所欄外に次のような付記があるという。すなわち、
ボリス・イヴァノヴィチ・モローゾフはヴァシーリー・トゥチコフ [と] ヨアン・トゥチコフの父である。

ヨアンはロマンの母イリーナの父である。	ヴァシーリーは [わが] 母マリヤの
ロマンは皇妃アナスターシアの父である。	父である。

すなわちクールプスキーは母方の血筋で皇妃アナスターシアにつながっているのである。

33) すでに何度も触れられたウラジーミル・アンドレーエヴィチ・スタリツキー公のこと。イヴァンの従兄弟。

来血に飢えてきた——わたしは大胆に真実を語ろう——他ならぬ汝の一族に嫁がされたのである³⁴⁾。

汝はまた生命を与える十字架の力により呪われしリヴォニア人を服従せしめた、といたる所で大袈裟に吹聴し、得意になっている。それが信じられるかどうかわたしには分らないし、見当もつかない。だがむしろ盗賊どもが磔にされた十字架³⁵⁾の旗によってと言うべきではなからうか！汝の十字架はすでに多くの町においてジャプカ某³⁶⁾の手で、また首都ケシではラトゥイシ人の手で早々と引き倒されていた³⁷⁾。それはまだわが王³⁸⁾がその玉座から立上がって進撃し始める前のことであった。全士族がまだ家^{シユラハタ}にあって出征しておらず、王の全軍隊が王の側近くまだ陣営に留まっていた間のことであった。それゆえ汝の十字架とは実際にはキリストの十字架ではなく、一人の盗賊の前を運ばれていった、滅びし盗賊の十字架である。リャフ人³⁹⁾やリトワ人の軍司令官らは汝にたいする遠征準備をまったく始めていなかったのに、汝の呪われた司令官ら——浮浪人どもと言った方が正確なのだが——は鎖につながれて汝の十字架の下から引きずり出され、当地の様々な層の国民が出席する大会議^{ソイム}の場で全員から嘲笑され、罵倒されたのである。この呪われた者どもは、汝と聖なるルーシの地⁴⁰⁾全

34) ウラジーミル・スタリツキー公は二度結婚しているが、二度目の妻エウドキア・ロマーノヴナ・オドエフスカヤはクールプスキーの従姉妹。

35) マタイ27：38を参照。

36) ジャプカ某とは、16世紀のポーランド・リトワ年代記作者M・ストリコフスキが伝える「勇猛なるカザーク・ザバ」のことか。ストリコフスキによれば、リヴォニアのデュナブルク（ネウギン、現ダウガウピルス）要塞はポーランド・リトワ軍によって奪取されたが、そのとき上記ザバ（サヴァカ）が活躍したという。これは1577年11月、すなわちイヴァンがその第二書簡を誇らしげに書いた直後のことであった。ところでリヴォニアの年代記作者B・リュソフにも、デュナブルク攻略戦に際してポーランドのサペハ軍のなかにウェンツェル・ザバなる者がいたという記述がある。これがストリコフスキの言う同名人物と同一人物かどうかは分らない。

37) これは1578年10月21日のケシ（ヴェンデン）近郊の戦いのこと。このとき以前にはロシア軍の側についていた原住民（ラトゥイシ人）がポーランド軍の側にまわり、ロシア軍は壊滅的な敗北を喫した。

38) ステファン・バトーリー王（在位1576—86）のこと。

39) ポーランド人のこと。

40) クールプスキーが祖国を「聖なるルーシの地」と呼んでいることは重要である。と

体にとっての忌むべき永遠の恥辱であり、ルーシの民の子らの名折れである。

汝はまたクルリャーチェフやプロゾロフスキーまたシツキーらに言及する。だがわたしには汝の言う「装身具」や「魂の平安のために」⁴¹⁾が何のことなのかまるで理解できない。汝はクロノスやアフロディテーの件、さらに銃兵の妻たちにも触れる⁴²⁾。それはまるでお笑い草、何か酔った婦人の繰り言に似ている。答える必要もあるまい。いとも賢きソロモンは「愚かな者には答える必要はない」と述べている⁴³⁾。なぜなら上に記したすべての者たち、プロゾロフスキーやクルリャーチェフらのみならず、数知れぬ高貴な家柄の人びとが残忍な迫害によって抹殺され、その代りに残ったのは浮浪人どもであったからである。汝はこのような者どもを軍司令官の地位につけんとし、理性と神にたいし真向から戦いを挑むこととなった。このため彼らはほどなくしてその町々と運命を共にしたのである。彼らは一人の戦士に恐れをなすただけでなく、風に標う一枚の木の葉の音にも怯え⁴⁴⁾、かくて町々と共に滅び去ってしまった。あたかも聖なる預言者モーセが申命記において、「汝らの不法ゆえに一人が千人を押し、二人が万人を追うであろう」と述べているとおりで⁴⁵⁾。

同じ書状のなかで汝はすでにわたしの書簡に答えた、と記している。だがわたしも大分以前に、汝の大仰な書簡に答えておいた⁴⁶⁾。ただそれを御地の不名

いうのもM. チェルニャフスキーによれば、この語を初めて使用したのは他ならぬクールプスキーであり、16世紀の段階では他に例がないからである。彼は亡命後この語を用いるようになったが、とくにその『歴史』のなかでは八度この語を用いているという（五度は「聖なるルーシの地」の形で、一度は「聖なるルーシの王国」、二度は「聖なるルーシの帝国」の形で）。

41) 本稿58頁参照。引用符は原文にはない。

42) クロノスについても本稿58頁。だがアフロディテーについては、イヴァンは触れていない。むしろそれへの言及はクールプスキー自身の第一書簡（ただし第二版）においてなされている。銃兵の妻についても本稿59頁に言及されていた。ただしそこでは単数になっていた。

43) 箴言26：4－5。

44) レビ記26：36。

45) 申命記32：30。

46) クールプスキー第二書簡のこと。後述されるようにこれはすぐには送付されず、本書簡（クールプスキー第三）とともに送付された。さらに本稿（I）—110頁参照。

誉な慣習のゆえに送り届けることができなかつた。というのも汝がロシア王国^{ツァールストヴオ}を閉鎖してしまつたからである。それにより汝は人間の自由な本性をあたかも地獄の要害に閉じこめたかの如くであつた。もし誰であろうと、シラクの子イエスが述べるように⁴⁷⁾、預言者の如く汝の国を去り、異国へ行こうとする者があれば、汝は彼を裏切者とよぶことであろう。そして国境で捕えると、様々な方法で死刑に処すのだ。今では当地でも汝に倣つて、同様に残忍な処刑が行われている。これほど長い間汝に返書を送らなかつたのはこのためである。だが今や汝のこのたびの書状にたいする返書とともに、以前のあの大仰な書簡にたいする返書をも、大いなるツァーリ陛下に送付しようと思う。もし汝に分別があるならば、気持を鎮めて怒らずに最後まで読み通されんことを！さらにもう一つ汝に願いたい。これ以上異国にいる家臣に書こうなどとは思わないでいただきたい。ことにここでは皆答える術を知っているのだから。ある賢人もこのように述べている。「汝は話すことは望んでも、聴くことは望まない。」⁴⁸⁾これが汝の言い分にたいするわたしの回答である。

汝はさらに、わたしが汝に服従せず、汝の地に君臨しようと思つたと記し、わたしを裏切者、流刑者と呼んだ。だがこれが中傷で、わたしにたいする呪咀に他ならないことは明らかだ。それゆえわたしはこれには答えずにおこう。同様に他の点についても返答はさし控えよう。というのも汝に答えるのも、汝の書状に返書を認めるのも、わたしの汝にたいする書簡を要約すればすむことであるからだ。そうすればあまりに冗長になつて野蛮になることもないだろう。あるいはまた、われらの主なる神キリストの公平無私な裁きに委ねることによつて。これについてはすでに以前の書簡⁴⁹⁾において何度も記したところである。賤しきわたしはもうこれ以上ツァーリ陛下と言ひ争いたくはないのだ。

いずれにせよわたしは汝に、まだローマ人が全世界を支配していた頃のローマで、もっとも偉大な元老院議員であつた賢人キケロの著書から、二章を抜き

47) ベン＝シラクの知恵39：4に、賢者は「異民族の地をひろく旅し、人間の善悪両面を体験している」とある。

48) 出典不明。

49) 複数。クールプスキー第一、第二書簡のことか。

書きして送ろうと思う。これは彼が自分のことを流刑者そして裏切者と非難した敵にたいして書いた返書である。それと同様に陛下も己の残酷な迫害の心を抑えることができずに、遠方から火の如き非難の矢を、理由もなくしかも空しく、この賤しきわれらに射かけてきたのだ。

コーヴェル公アンドレイ・クールプスキー。

徳ある者にとって、その幸福な生活を妨げるものは何もない。パラドクスとよばれるキケロの才智あふれる書物からの抜粋。アントニウスを論駁す⁵⁰⁾。

さてわたしはマルクス・レグルス⁵¹⁾が打ちひしがれていたとか、不幸であったとか、呪われていたとか思ったことは一度もなかった。なぜならわたしは彼の叡智がカルタゴ人によって圧殺されなかったことを知っているからだ。彼の威厳も、信念も、不動心も、あらゆる徳も、彼の精神自体もまた圧殺されはしなかった。彼の精神は偉大な善行の援軍を従え、徳の大軍に護られていた。だから彼の肉体が引き裂かれたとしても、彼自身が真に滅ぼされることはありえなかった。わたしはまたマリウス⁵²⁾をこの目で見た。彼は順境にあっては一人の幸福な人物に見えただけであったが、逆境にあっては格別すぐれた人間に思われた。死すべき存在にとってこれ以上に祝福さるべきこともあるまい。汝は知らぬので

50) 以下に続く文章はキケロ（マルクス・トゥッリウス、前106—43）の『パラドクサ』第二及び第四の比較的忠実な翻訳（抜粋）である。この書は前46年頃のもので、ブルトゥス（マルクス・ユニウス）に献げられている。なお邦訳、水野有庸「ストア派のパラドックス」（鹿野治助責任編集『キケロ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス』中央公論社（世界の名著14）昭和55年所収）がある。ここで言うアントニウスはキケロを憎むこと蛇蝎の如くであった、といわれるマルクス・アントニウスのことであろう。（もっともこの部分はラテン語原文にはない。）

51) ローマの将軍・政治家。第一次ポエニ戦争の際カルタゴ側に捕えられる。和平締結交渉のためローマに派遣されたが、元老院にはこの提案を拒否するよう説く一方、自らはカルタゴ側に対する誓いを守って、カルタゴに戻り、残酷な拷問をうけて獄死した。

52) ガイウス・マリウス（前157—86）ローマの将軍・政治家。ユグルタ戦争やキンプリ＝テウトニ族などとの戦いに軍功をあげ、七度執政官となった。キケロは彼の下に仕えたことがあり、つねに敬愛の念を抱いていた。

あろうか、愚か者よ。徳がどれほどの力をもっているのかを、知らぬのであろうか。汝は自分が有徳の人士であると言う。だが汝は徳の何たるかをお分かりではないようだ！誰であろうと、自分自身で完全に充足している者、また自分自身のうちに自分のものがすべてであると考える者以上に、祝福されることはありえない。だが自らが望んでいることと理性と思惟とを僥倖に依存させるような者には、自明なことは何一つなく、自分で知っていると思っていることでも、実に一日たりとも確固としてはいないのだ。もしこのような者を見かけたなら、死や追放のおどしで威嚇するのもよかろう。だがわたしはこのような者とはちがう。わたしはこの忘恩の祖国において何が起ろうとも、あらがわぬばかりか、つぶやきもせず甘受するだろう。一体わたしは何か苦勞したと言えるだろうか。何かをなしとげたり、不眠不休で働いたり、考えたと言えるだろうか。もしわたしを頑固な運命も敵の不正も揺るがすことのない玉座に即けてくれるようなものを、わたしが何一つ真に産み出さず、獲得もしなかったのであるとしたならば。はたして死がわたしを脅かすであろうか。それはまことに人の世から来るものにすぎない！追放刑はどうか。それはただわたしを悪人の下から引き離すだけだ！⁵³⁾ 死を恐れるのは、生命とともにすべてが失われる者たちであって、消え去ることのない名誉を尊ぶ者たちではない。追放を恐れるのは居住地が定められている者たちであって、周囲の地がいつでも同じと考える者たちではない。ところが汝には忌むべきことが、[所有物の]喪失が、その他あらゆるものが押しよせてきている。それなのに汝は自分が幸いな者、上昇中の者と思っている。汝の情欲が汝を苛んでいるというのに！汝は朝な夕なに苦しんでいる。現在あるものに不満な者は、持っているものまでも早晚失われるだろうと恐れるのだ。汝の良心は汝を悪行ゆえに針のように刺しているではないか！裁きと法にたいする恐れが汝を脅かしている。どちらを向こうと、汝は己の不義が、あたかも野獣の如く汝を取囲み、汝に息つく暇を与えないのを見る

53) キケロは前63年いわゆるカティリナ陰謀事件（後述）を未然に防ぎ、元老院から「祖国の父」と呼ばれ、尊敬をうけたが、前58年クロディウス（後述）の策謀でローマから追放された。先にこの本文で「忘恩の祖国」とローマのことを言っているのも、このことと関連する。

であろう。だから悪人、愚者、醜悪な者には善きことがあろうはずがないのである。同様に善人、賢者、勇気ある者が不幸であるはずがない。その者の徳と習慣が称賛すべきであるなら、その生活も称賛に値しないことはありえない。実際称賛に値する生活を回避すべきではあるまい。忌むべき生活であるならば、回避するがよかろう。それゆえ何であれ称賛に値するものとは、また祝福され、繁栄し、切望されるものであるはずだ。

不当にもキケロをローマ市から追放したクロディウスにたいする反論。第7章⁵⁴⁾。

愚か者は皆狂人である。わたしは汝をふだんのように愚か者とは呼ぶまい。いつものように悪人とも呼ぶまい。その代わりわたしは汝が理性を失った狂人であることを事実をもって論証しようと思う。賢者の理性は偉大な知恵により、また人の世の諸事を耐え忍ぶ心、僥倖を恃まぬ心そしてあらゆる善行により、城壁の如く守られている。はたしてそれが打ち負かされたり、屈服させられたりすることがあるだろうか。都市〔国家〕から真に追放されることもありえないのに。というのも一体都市とは何であろう。それは人間愛を知らぬ酷薄な者どもの集合体であるのだろうか。盗賊や脱走者が群をなして集まるどころなのだろうか。もちろん汝はこれを否定するであろう。それならばあの時は都市〔国家〕ではなかったのだ。あの時分には内部で法が何事もなしえず、裁判は無視され、父祖の慣習は忘れさられ、有力者が剣で追われ、共和国でありながら元老院の名が蔑ろにされていたのであった。それはむしろ盗賊の集まり、汝を頭目にして市場につくられた盗賊の巣窟であった。そこではカティリナ陰謀⁵⁵⁾の参加者の片われが形を変えて、汝の兇暴な野獣の姿を見せていたの

54) 上述『パラドクサ』IV。何ゆえ第7章（写本によっては17章）となっているのかは不明。クロディウスは名門出のローマ人であったが、不品行と暴力行為で悪名が高かった。彼はカエサルの妻ポンペイアに邪恋し、この件でキケロが彼に不利な証言をしたのを根にもって、前59年護民官に選ばれるやキケロの追放を画策した。『パラドクサ』IVの執筆時クロディウスはすでに歿していたが、キケロは彼を生存中であるかの如くに、激しい言葉を浴びせかけている。

55) カティリナ（ルキウス・セルギウス）は貴族出身の政治家であったが、放蕩の果て

である。これが都市であったのだろうか。それゆえわたしは都市を追われたのではなかった。それは存在しなかったからだ。〔後に〕わたしが都市に呼び戻されたとき、共和国には市長〔執政官〕が存在していた。当時権威が失墜していたとはいえ、元老院が存在していたのみならず、自由な市民が活発に行動し、都市の支柱とも言うべき法による統治が行われ、人びとの心に生きていたのであった。ところで汝の盗賊どもが放った矢をわたしがものとしなかったことを知るがよい。わたしは汝がわたしにたいし悪質な攻撃〔の矢〕を放ち、仕掛けようとしていたことを、常によく弁えていた。しかしそれがわたしのところまで届こうなどとは思ったこともない。もっとも汝が〔わが家の〕壁を打ちこわし、非道にも屋根に火を放ったときのことは知らない。というのもあのとき汝は、わたしの財産が互解し、灰燼に帰すと思ったのかもしれないからだ。だが奪われたり、もぎとられたり、破壊されたりするものは、わたしのものではないし、誰のものでもない。もし汝がわたしからわが精神に宿る永遠に確固としたもの、労苦、勇気、賢策——共和国が倒れずに立っているのはこれらのもののおかげなのだが——を奪ったとしたなら、もし汝がこれらの永遠の徳行の不滅の記憶を消し去ったのなら、それどころかかの賢策の源である精神を汝がわたしから奪いとったとしたのなら、わたしは汝から大きな被害をうけたであろうことを認めよう。だがもし汝がこういうことを行わず、また行うこともできなかったとするならば、わたしの栄光の帰還は汝の乱暴狼藉のおかげであったのであり、悲惨な追放などはなかったのだ。それゆえわたしは常に市民であった。とくに良識ある〔元老院〕議員諸氏が、近隣諸国民に最高の市民としてわたしの保護を要請してくれたときにはそうであった。それに対し汝は今や真の市民ではあるまい。というのも一体誰が〔都市の〕敵でありながら、市民でありうるだろうか。それとも汝は市民と敵とを行為と精神によってではなく、生れや居住地によって区別するのであろうか。汝は市場で殺戮を行い、武

に多額の借財を負い、結局国家乗取りの陰謀を企んだと言われる。前63年執政官となったキケロはこの陰謀を事前にあばき、陰謀参加者を処刑した（カティリナ自身は翌年政府軍との戦いで戦死した。）このときの処刑が然るべき手続をふんでいなかったことが、後にクロディウスらの利用することとなる。

装した悪漢どもと寺院を占領し、無関係な市民の家や聖所に火を放った。もし汝が市民であるとするなら、スパルタクス⁵⁶⁾が敵だとどうして言えよう。一体汝のおかげで一度は都市が都市でなくなったのに、それでも汝が市民であるなどということがありえようか。わたしが去ったときに共和国もともに追放されたと誰もが思っているのに、汝は一人よがりにもわたしを裏切者と呼ぶのであろうか。無分別に荒れ狂うことを止めて、わが身を顧みるがよい。汝は自分が何をし、何を言っているのか考えてみようとは思わないのだろうか。追放は悪事にとってのみ処罰となることを知らないのであらうか。わたしが行ったのは旅行であって、それは以前のわたしの輝かしい偉業がもたらしてくれた賜物なのである。汝が頭目だと自認しているあらゆるならず者と不敬な輩。法が追放刑によって罰しようとしているのは彼らなのである。彼らはたとえ居所を変えずにいたとしても、実際には追放された流刑者である。それとも法のどの条項も汝を追放せよと規定していないからといって、汝が裏切者でないことになるだろうか。武器を携えていても、敵とはみなされないのであらうか。元老院の前で汝の剣は暴かれているのだ。誰が人を殺したのか。汝が殺した。誰が火を放ったのか。処女の館は汝の手にかかって焼け落ちた。誰が神々の宿る神殿を占領したのか。汝が手下を「神殿のある」市場に配置した。けれどもわたしが「万人に」共通の法について解説する必要もあるまい。どの法も例外なく汝を裏切者とみなしているのだ！汝の仲間であるコルニティウス⁵⁷⁾は汝を対象とした法を作成した。それによると、誰であろうと女神ボナ「の神殿」の屋根の下に入る者は、裏切者となる。ところが汝はこの禁を犯したことを、いつも誇っているのだ！一体汝はこれほど多くの法文によって追放刑に定められていながら、裏切者であることを恐れないのであらうか。「自分はローマにおる」と言うつもりであらうか。そのとおり！汝は「自分とは」無縁の避難所にいるわけだ。だが誰がどの地にいようと、土地の法に服す必要がないとするならば、彼がそこに滞在する権利もなくなるわけだ⁵⁸⁾。

56) スパルタクスの反乱(前73—71)の指導者。剣闘士。

57) 不詳。ラテン語原文にはこの名は出て来ない。「腹心中の腹心」とあるのみである。

58) 以上でケケロからの引用は終る。リュコフによれば、クールプスキー第三書簡の主

ああツァーリよ、よく注意して見ていただきたい。もし異教の哲学者たちが自然の法によりながら、「[互いに] 思慮深く訴え、あるいは赦す」と言った使徒のように⁵⁹⁾、相互に驚嘆すべき分別をもって、かくほどの真理と理性に到達していたとするならば、——それゆえにこそ神は彼らに全世界を支配することを許されたのであるが——われらはキリスト教徒と名乗りながら、なぜ学者やパリサイ人は言うまでもなく、自然の法によって生きるただの人びとの真理にすら及ばないのであろうか！ああ何とわれらは哀れなのだろう！裁きのときにわれらはキリストにどう答えようというのだろうか。どう弁明しようというのだろうか。汝に宛てた最初の書簡⁶⁰⁾を書いてから一年ないし二年たったとき、わたしは神が汝にたいし、汝の行いと手の働きのゆえに、どのような罰を下されたのかを見た。すなわち汝と汝の軍勢に忌わしき、この上なく恥ずべき敗北が下されたのであった⁶¹⁾。それにより汝は、大いなるルーシを至福と栄光のうちに支配したルーシの偉大なる諸公、また汝とわれらが父祖の誉れと聖なる追憶とを台無しにしたのであった。それだけではない。汝はわたしが先の書簡⁶²⁾で指摘したような罰や断罪を神からうけながら、顔を赤らめもしければ、

文はここで終り（1577—78年執筆）、以下に二つの付記が続く。これにたいしシュテーリンは以下別個の二書簡（「クールプスキー公のツァーリ・イヴァンにたいするポロツクからの第一書簡」及び「同第二書簡」）が始まると考えている。フェンネルも同様で、「クールプスキーの第四書簡」「同第五書簡」と名付けている。これについてはさらに本稿（Ⅰ）—109-111頁を参照。

59) ロマ 2 : 15。

60) これは本稿の底本とするテキストの校訂者（リュコフ）の立場からすれば、当然文字通り「クールプスキー第一書簡」。従ってその執筆後—ないし二年後にイヴァン（ロシア）に下されたという神の罰とは、オプリーチニナ期の天災と人災のことになる。これにたいしてフェンネルはここを「以前の」ないし「先行する」書簡ととり、これを彼の言う「クールプスキー第三書簡」、すなわち本稿で言う「クールプスキー第三書簡の主文」と解す。この場合「神の罰」とはポーランド軍によるポロツク占領（1579年8月31日）のことになる。

61) 上に記した如くフェンネルによれば、ロシア軍のポロツクにおける敗北であるが、リュコフの立場からすればオプリーチニナ期の別の何らかの敗北ということになる。注解者のコプリンはとくにこれを特定せず、デヴレット・ギレイ軍のモスクワ破壊を含む災難と解している。

62) 複数形。従って当然クールプスキー第一及び第二書簡のこと。

不面目とも思わなかった。神は、ルーシの地にかけてあったためしのない汝の無法ぶりと数々の不義ゆえに幾多の罰を下され、汝の祖国の栄えある都モスクワに、神を知らぬイシマエルの末裔を派わしてこれを炎上せしめたのであった⁶³⁾。汝はまた忌わしいことに我を張って、ファラオの如く不従順な態度をとり、頑固に神と良心に反抗した。かくして汝は神がすべての人のうちに備えられた清き良心を踏みにじったが、この良心は、眠ることのない目と疲れを知らぬ番人のように、万人の霊と精神が滅びに至ることのないよう、守り保つために与えられているのである。ところでこれ以上にどんな愚行をあえて汝は行おうというのであろう。汝は生命を与える十字架の力が、敵と戦う汝を助けた、とわれらに書いてきたが、恥ずかしいとは思わないのであろうか！汝が心に抱き考えているのはこんなことなのであろうか。ああ人の愚かさよ！汝の霊は追従者と汝のお気に入りの偏執狂どものために、何と損なわれていることだろう！わたしは大いに驚いている。理性を有するすべての者、ことに以前の汝を知る者たちも同様だ。当時汝は主の戒めを守り、選り抜かれた優れた人びとを側近に抱え、勇敢で敵にとっては恐ろしく雄々しき闘士であったのみならず、聖書に精通し、聖なる汚れなき生活により浄められていた。だが今や汝は醜悪極まりない己が偏執狂どものゆえに、何と愚劣で無分別な墮落の深みに陥ったことであろう。汝はすこやかな理性すら奪われてしまったのだ！

汝は、われらに対する教訓として書かれた聖なる書物のなかに何とあるのか、覚えてはいないのだろうか。そこには全能の神とその聖霊が汚れ多き者と悪賢き者を助けることはない、と記されている。旧約聖書のなかに次のような話がある⁶⁴⁾。すなわち、ヤコブの神の御名によりヨルダン川の水かさが増し、その流れはせき止められた。これは主の契約の箱と、彼ら〔イスラエルの民〕がその場に持っていた他の〔聖〕事物——それは神の栄光のために創られ、至聖なるものと呼ばれた——とによって起ったことである。そしてエリコの城壁が崩

63) クリミア汗デヴレト・ギレイ軍の襲撃(1571年)。本稿注(17)を参照。

64) 以下ヨシュア記3—8章。アカルはアカン(7章)とあるべき。数字は誇張されている。

れ落ち、敗北も屈服も知らぬ諸王が多くの異邦人や巨人たちとともに彼らの面前から消えうせた。だがアカルのただ一つの罪ゆえに主の怒りが全イスラエルに及び、異教徒の男50人がイスラエルの番兵に襲いかかり、たちまちのうちに、20歳から60歳までの屈強な男たち60万人からなる全イスラエル軍が散り散りになった。かくして全イスラエルが、あたかも流れ去る水の如くに、潰え去ったという。これはモーセとヨシュアの時代のことであった。他の預言者すなわちサムエルとダビデの治世に起きたことについても何か語るべきであろうか。祭司エリの子らの不浄と狡猾ゆえに全イスラエルはいかにして敵の前に滅んだのであろうか。主のすべての聖事物はいかにして異教徒に渡されたのであろうか⁶⁵⁾。だがこれらをこの書簡で順序立てて記すことは止めよう。それはあまりに長すぎるからだ。加うるにわたしは汝が聖書に詳しいことを知っているのだから。

以上の如く、旧約聖書には、主の聖事物が神を喜ばす善人には助けとなり、血に飢えた汚れ多き悪人どもにはむしろ仇となることが、簡潔に記されている。新約聖書〔の時代〕においては、それらすべてに代って十字架の力がわれらキリスト教徒に助けを与えてくれる。あたかもコンスタンティヌス大帝がまだ啓蒙されずに異教徒であったときに、星の形づくる生命を与える十字架の標が天空に現われて彼を導き、信仰への道を示し、驕れるマクセンティウスにたいする栄えある勝利をもたらした如くである⁶⁶⁾。ところでこのコンスタンティヌス大帝が蒙を啓かれ、すでに久しく正教信仰に励んでいたときに、追従者や醜悪なる阿諛者〔の甘言〕に耳を傾け、自らが上フリギア地方を征圧すべく派遣した三人の使者を罪なくして逮捕監禁するよう命じた。金に目のくらんだ総督の讒言や偽りの中傷にのったのである。だが彼が獄につながれた三人を斬首するよう命じたその晩に、まさにその晩に、とわたしは強調したいのだが、不幸な者をすみやかに助ける聖人ニコライが——当時彼は現実に生きていた——彼ら

65) サムエル記上2—3章。イヴァンもその第一書簡で聖書の同じ故事に言及している。
(本稿 (I) —139頁)。

66) 上述56頁、注(7)及び61頁を参照。

の呼ばれる声を聞いて、彼らのことを神に祈り、彼らを苦境から救い出すために、すぐさま閉ざされた扉を通して皇帝の寝室に姿を現わした。われらのキリストが弟子や使徒たちのもとに姿を現わされたときのようにである。ニコライは皇帝に厳かに次のように言った。「ああ皇帝よ！ 汝に罪なくして裁かれ、獄につながれているネポティアヌス、ウルスス、エルピリオンをすみやかに解き放つよう命じなさい。もし汝がこれを行わぬのであれば、わたしは汝に仮借なき戦いを挑むであろう。そのみならず、汝と汝の家に恥ずべき敗北とおぞましき滅びとをもたらすであろう！」この件に関しては聖シメオン・メタフラステスが聖ニコライ伝において、その生涯をたどった折に詳しく伝えている。わたしのみるところでは、汝らの国ルーシでは、全世界の導きの星であるこの聖人の真実の伝記はまだ翻訳されていないようだ⁶⁷⁾。

これにたいし陛下の残酷さといったら、どうだろう。汝は一人のネポティアヌスと二人の無辜の人物を滅ぼしただけではない。数知れぬ高貴な血筋よき軍司令官や將軍たち、行為と知恵において秀でた者、若き時より軍事と軍隊指揮にすぐれた手腕を発揮した者、戦場で敵を倒すことにより最強かつ最良の武人であることを証明してみせた人びと、汝は彼らを様々な方法で死に至らしめた。彼らの一族をも、裁判も正義もなく、己が耳を一方にのみ、すなわち邪な追従者や祖国の破壊者どもにのみ傾けて、皆殺しにしたのである。これほどの醜行と流血をほしいままにした汝は、その後偉大なるキリスト教徒の軍勢を異国に、その町々の城壁の下へと送りこんだ。だが熟達した百戦練磨の將軍もなしに、それどころか分別ある勇敢な指揮官も、偉大な軍司令官^{ゲトマン}もなしに、これを行おうとした。これは軍隊にあっては何にもまして破壊的で有害である。すなわち手

67) 聖人ニコライ。4世紀リュキア（小アジア南西部）のミュラの主教。水夫、子供、商人等の守護聖人として最も広く尊崇された。10世紀ビザンツの文人シメオン・メタフラステスのニコライ伝は、コ布林によればクールプスキーの時代にはすでにルーシでも知られていたという。（マカーリー府主教の『ヴェリーキエ・ミネイ・チェチャー（大聖者伝）』にこの話が含まれている。）もっともクールプスキーは他の版（翻訳）を利用したと思われる。それはニコライのコンスタンティヌスへの呼びかけは上の『大聖者伝』にはみえないからである。シュテーリンは、クールプスキーが1556—1558年にウィーンで出たラテン語版を利用したのであると推察している。

短に述べるならば、彼らは人間ならぬ羊と兎の群とともに、しかも善き牧者がいないために、風に漂う一枚の木の葉にも怯える羊と兎の群とともに「やって来たのだ。」わたしは先の書簡で汝の浮浪人どもに言及した⁶⁸⁾。前にふれた優れた勇気ある者たち——彼らを汝は打ち殺し追放したのだが——に代って、汝が恥知らずにも軍司令官に仕立てあげようとしているのは、このような者たちである。

だが今や汝はこれに止まらずに、己の父祖の前にさらにもう一つの恥辱をつけ加えた。それもこの上なく恥ずかしく、千倍も惨な恥辱である。汝はポロツクの町をその全教会、すなわち主教と全聖職者もろとも、また兵士と民を含めてそっくり明け渡してしまったのである。それは汝の面前で行われた。かつて汝自らが苦勞して攻めとった町であったのに⁶⁹⁾。だが汝を刺激してもいけないので、われらの忠実な奉公と多大な労苦のおかげで「この町が汝の手に入った」とは言わぬことにしよう。というのも汝がポロツクを奪取したときには、汝はまだ誰彼となく殺害したり、追放したりしてはいなかったからだ。ところが今や汝は全兵士を身辺近く集め、日陰者か逃亡者のように森の奥深く身をひそめながら、震えおののき、消えいらんばかりになっている。汝を追う者など誰もいないのに⁷⁰⁾。ただ汝の内なる良心だけは、その醜行と数知れぬ殺戮ゆえに汝を追

68) クールプスキーが「浮浪人」 калики に言及したのは前述71—72頁。つまりクールプスキー第三書簡の「主文」。これをクールプスキー自身がここで「先の書簡」と記すところから判断すれば、「主文」とこの第一の付記は別々の書簡であると考えられる。シュテーリンやフェネルの見解も首肯すべきものを含んでいるように思われる。リュコフらは当然このようには考えないのだが、この箇所に関する限り説得的説明は与えられていない。

69) ロシア軍がポロツクを占領したのは1563年2月15日。それをポーランド側が1579年8月31日に奪回した。ポロツクのロシア軍による占領がリヴォニア戦前半の記念すべき勝利であったとすれば、後半におけるその喪失はリヴォニア敗戦の象徴的出来事であった。なおここで「汝自らが苦勞して攻めとった」と訳出したのは его же был достал еси персми своими で、おそらくは「汝が自己の胸で手にいれた」とすべきところ。персиは胸の意。ただしこれには古プスコフの都市防備の一部という意味もあり（スレズニェーフスキー）、シュテーリンはここから、「汝の堡壘によって」と訳している。フェネルは原義を尊重しながらも「強襲によって」と訳す。

70) イヴァンがオプリーチニナ創設後、アレクサンドロフ村を要塞化して閉じこもった

及している。ここに至っておそらく汝がなしうるのは、酔った女奴隷のように、罵り合うことだけであろう。これにたいしツァーリの位に真にふさわしくまた当然あるべきこと、すなわち正しき裁判と保護とはすでに失われたも同然である。それは狡猾きわまりないヨシフ派⁷¹⁾の一味や、僧侶であると俗人であるとを問わず、その他の悪質この上ない汝の助言者たちの祈りと口添えのゆえであった。自分より賢い者らの会議^{71a)}を設けることのないように、と汝の耳許で囁き、進言したのはそのなかの一人ヴァシアン・トポルコフ⁷²⁾であった。汝が彼らから得た栄光とは以上の如きものであった！彼らは汝に何と輝かしい勝利をもたらしたことだろう！それはすでに聖ニコライが三人の男のことでコンスタンティヌス大帝に予言した通りである。また汝の懺悔聴問僧であった至福なるシリヴェーストルも汝の恥ずべき行為とおぞましき慣習を指摘して諫め、幾度となく予言した通りである。そして汝は彼にたいしその死後もなお仮借なき敵意を顕わにしているのだ！それとも汝は預言者イザヤの書に、「敵の愛想のよい接吻より、友人の笞や棒の方がましである」⁷³⁾とあるのを読んだことがないの

ことを皮肉っているのだろうか。もちろん「今や…」というのが文字通り本書簡執筆のとき、というのであれば話はちがってくるが。

71) ヨシフ・ヴォロツキー (1439/40—1515) を中心とするロシア正教会多数派。皇帝権と緊密に結びついて教会の影響力の拡大に努めた。クールプスキーはヨシフ派に反感を抱いている。

71a) ここでクールプスキーは рады というポーランド語からの借用語を用いている。彼はいわゆる「選抜会議」Избранная рада を念頭においていると思われるが、この語自体は本往復書簡のなかでは用いられていない。(Избранный совет という言い方は出てくる。本稿66頁参照。) イヴァン雷帝治世前半のモスクワ政府の中核をなした機関を「選抜会議」と呼んだのは、他ならぬクールプスキーであったが、それはその『歴史』においてのことであった。(Сочинения князя Курбского. стр. 172, 280, 309, 317.)

72) ヴァシアン・トポルコフはヨシフ・ヴォロツキーの甥。ヨシフ・ヴォロコラムスキー修道院長から、1525年コロムナ主教となったが、1542年「狡猾と残忍」を理由に罷免され、ペスノシュキー修道院(ドミートロフ近郊)に隠棲した。イヴァン雷帝は1553年、病気回復後の聖地巡礼の際にここに彼を訪ねた。このときイヴァンに随行したクールプスキーは、両者の会談の模様をその『歴史』のなかで詳しく伝えている。それによるとイヴァンはヴァシアンにツァーリとしてどう君臨し、「勢力ある有力者」(貴族)をどう服従せしむるべきかを問うたという。これにたいする後者の答えは、クールプスキーによればまったくキリスト教の教えに反するもの

だろうか。

汝、過ぎ去りし日々を想い起し、また元の姿に戻るがよい。汝は今なお頭を空にして、愚かにも己が主にたいし無礼を働いているのであろうか。それともまだ分別をとり戻し、悔い改め、キリストに帰るときではない、というのであろうか。われらはまだ今のところ肉体に別れを告げていない。[だから悔い改めをするとすれば、今のうちだ。] というのも死後は何も考えることができず、地獄では誰もが告白し、悔い改めるからだ。汝は以前は賢明であった。それゆえわたしが思うには、汝は霊の三部分⁷⁴⁾を知っているはずだ。死せる部分は不死の部分に服従するのである。もし知らないというのなら、さらに賢明な人びとから教わるがよい。野獣の部分を克服し、神の形とその似姿に服従せしめるように。古来すべての者が劣ったものをすぐれたものに従わせながら、救いを見出してきたのである⁷⁵⁾。

また途方もなく不遜で傲慢なことだが、汝は自分を賢者と思い、全世界の教師を自任している。そして異国とその臣民に書簡を送って教えを垂れ、命令を

であった。すなわち彼はこう答えたという。「もし汝が専制君主であらんと欲するならば、汝自身より賢い助言者を側近に一人としておいてはならない……このようにすれば汝〔の地位〕は王国において確固たるものとなり、万人を己が手中に握ることになるだろう。」クールプスキーの反ヴァシアン・トボルコフ感情は激しく、彼を「悪魔の子」と呼び、名前にふさわしく「高貴な栄光ある人びと」の首をはねたと非難している。すなわちここではトボルコフが斧を意味する語の派生語であることからくる言葉遊びが行われているのである。

73) イザヤ書にはこのような文章はない。おそらくそれは箴言27：6の自由な引用であろう。（前述65頁にも類似の引用がある。）

74) おそらくはディオニシオス・アレオパギタの言う理性、感情、意志のこと。イヴァンがその第一書簡で言及していた（本稿（Ⅱ）—144頁）。

75) 多くの写本ではこの箇所欄外に次のような付記があるという。「これに関しては至福なるイサク・シリンの書と至賢なるヨアン・ダマスキンの書を見よ。思うに汝の地では〔これらの書物は〕ギリシア語から完全に訳されてはいない。だがここ、われら下ではキリストの恵みにより、全体が完全に訳出されており、熱心に校訂されている。」シリア（ニネベ）のイサクは7世紀の苦行者で、その著書は14世紀後半聖アトス山で教会スラヴ語に翻訳されたという。フェンネルは16世紀リトワやモスクワでもこの訳が読まれたと推測している。シュテーリンはクールプスキーがより早くからあるラテン語訳を利用したと考えている。8世紀ビザンツ最大の教義学者であったダマスクスのヨアンネスの著書の主たるものは900年頃には教会スラヴ語に訳されていたという。

与えているのだが、それこそ当地では物笑いの種、嘲りの対象となっている。それとも汝は、大いなる使徒パウロが「他人の僕を裁き、命令する汝は一体何ものなのか」云々と述べた言葉⁷⁶⁾を聞いたことがないのだろうか。陛下も気を静め、落ち着いて、正気に帰るべきである。すでにその時なのだ！肉においてはすでにわれらにも死が迫っている。だがわれらは死ぬことのない霊と精神とをもって神に目見えんとしている。もはや空しきこの世の生活に汲々としている時ではあるまい。アーミン。

わが君主、その英雄的活躍においてことに令名高い、栄えあるステファン王の栄光の都ポロツクにて記す。ポロツク占領後の第三日⁷⁷⁾。

コーヴェル公、アンドレイ・クールプスキー⁷⁸⁾。

もし預言者らが、エルサレムの町と美しく飾られた壮麗な石造教会、また町とともに滅んだその住民のことを思って嘆き悲しんだとするならば、われらが、生ける神の町と人間ならぬ神が建てられた汝の地上の教会の荒廃を見て、いたく泣き叫んだとしても、何も驚くべきではあるまい。そこにはかつて聖霊が宿っていた。それは称賛すべき悔い改めのゆえに浄められ、清き涙に洗われていた。そこから清き祈りが馥郁^{ふいく}たる聖油や薫香の如くに、主の玉座へと立ち登っていた。そこでは正教信仰の固い基盤の上に敬神の事業が成就されていた。その教会においてツァーリの霊は、銀色に輝く雌鳩の翼の如くに、その懐のなかで黄金よりも清く明るく照り輝いていた。それは聖霊の恩寵により、キリストの肉といとも気高き血〔による罪の贖いの業〕——それによりわれらは悪魔の働きから救い出されたのであった！——を強めかつ浄めんとする行為によって、美しく飾られていた。汝の地上の教会はかつてこのようなものであった！このゆえにこそすべての善人がキリスト教の十字架を描く〔汝の〕旗に従ったのである。

76) ロマ14: 4。

77) ポーランド軍によるポロツク占領は1579年8月31日。それゆえこの付記は同年9月3日の執筆ということになる。

78) リュコフによれば以上がクールプスキー第三書簡の最初の付記。以下第二の付記が始まる。

あらゆる蛮族の民が、町はおろか国をあげて汝の前に降り、[われらを] 守護する大天使が自らの軍勢を率いてキリスト教徒軍を先導し、わが民の領域を定めて、神を畏れる者たちの周りを囲み、保護したのである。それは聖なる預言者モーセが「敵を威嚇し、仇をうった」と述べた通りである⁷⁹⁾。当時はこちらであった。繰り返して言おう。当時、汝は、至福なるダビデが述べた如く、選ばれた者たちとともに選ばれ、尊師がたとともに尊ばれ、罪なき者とともに汚れなき存在となっていた⁸⁰⁾。生命を与える十字架の力が汝と汝の軍勢を保護していたのである。

ところが墮落した悪賢い者どもが汝を誘惑し、汝は逆らう者となった。汝はかくの如き悔い改めの後に「心変りをし」、自らお気に入りの追従屋どもの口添えと唆しに乗って、吐き気をもよおさせるような以前の生活に舞い戻ってしまった。彼らは汝の地上の教会を忌わしい行為の数々で汚し、ことに五つの町⁸¹⁾の底知れぬ醜行と他の筆舌に尽しがたい無数の悪行によって墮落させてしまった。われらを滅ぼし尽さんとする悪魔は、古来このような者どもを用いて、人類を神の前に不遜で汚れ多き者となし、最後の滅びへと押しやろうとする。現在陛下に起らんとしているのも同じことである。すなわち悪魔は、汝に憚ることなく真実を伝えんとする選ばれた尊師がたに代わって、厭うべき寄食者と偏執狂を汝に派わした。屈強な將軍と指揮官に代わって、醜悪この上ない、神を神とも思わぬベーリスキー一族とその一派を⁸²⁾、また勇敢な戦士に代わって、血に飢え、死刑執行人より何万倍も忌むべき特別隊員ないしオプリーチニキ

79) 出エジプト23:22か。

80) 詩篇18:25-26か。

81) 不明。創世記18-19章にソドムとゴモラの町が道徳的頹廢のゆえに神の罰を受け滅びた記事がある。この二つの町はいわゆるヨルダン低地の五町の中心として知られている（創世記14章）ので、クールプスキーはこれを念頭においていたのかもしれない。シュテーリンやフェンネルはカラムジンやウストリャーロフに従ってこの「五つの町」 *пятоградные* を *педерастными* すなわち「男色の」に読みかえている。

82) ここに言われているのはオプリーチニナの指導者の一人、死刑執行人のマリュータ・スクラートフ（グリゴリー・ルキヤノヴィチ・ベーリスキー）とその甥でイヴァン雷帝の寵臣ボグダン・ヤコヴレヴィチ・ベーリスキーらのこと。とくに後者はイエズス会士ポッセヴィーノによれば、13年間にわたってイヴァンの寵を受け、彼と

を⁸³⁾、さらに神の靈に満たされた書物と聖なる祈り——汝の永遠の靈はそれを楽しみ、汝ツァーリの耳はそれにより聖化されていたのであるが——に代わって、あらゆる楽器を用いて神を憎む悪魔の歌——それは神の知恵に聴きいらんとする耳を汚し、それに栓をしてしまう——を奏でる、^{スコモローヒ}旅芸人⁸⁴⁾どもを派わしたのであった。また汝自身も、清き悔い改めを説いて汝を神と和解せしめたかの至福なる司祭や、汝としばしば靈の交わりをもった他の助言者たちに代って、妖術使いや魔術使いを遠方の国々から呼び集め、神を神とも思わぬ汚れしサウルが行った如くに、彼らに幸福な日々のことを問い合わせたという⁸⁵⁾。わたしにはこれが事実かどうか分らないが、当地ではこう伝えられている。さてサウルは神の預言者を蔑ろにし、マトロパあるいはフォトニサ⁸⁶⁾、すなわち女妖術師の所に行き、迫りくる戦いについて伺いを立てた。彼女は彼の希望を容れ、魔術により預言者サムエルを死者のなかから呼び起し、彼の前にその幻を示した。これについては聖アウグスティヌスがその著述のなかで見事に解説しているところだ⁸⁷⁾。だが結局のところサウルはどうなったのであろうか。それは汝自身がよく知っている。至福なるダビデが述べる如く、彼と彼の王家には滅びがやってきた。ダビデは言う。玉座を不法の源とする者は神の前に長く立つことはできない、と⁸⁸⁾。これはすなわち困難で、耐えがたい命令や法令を出す者のこと

寝室を共にしていたとすら言われている。ここに言われるベーリスキー一族はゲジミノヴィチの末裔である有名な公家とは別のもの。

83) 前述66頁注(18)

84) ロシア中世の旅芸人は反キリスト教的存在として教会当局によってしばしば弾圧されたが、クールプスキーもこの点正統的立場に立っている。雷帝は自己の宴会によくスコモローヒを呼んだと言われる。

85) 魔法ないし妖術は中世ロシアで広く行われた。イヴァンもこれに頼ることが多かったようで、英国人J. ホーセイが伝えるところによると、最晩年のイヴァンの宮廷にはラップランドから来た60人の男女の魔術師がいたという。

86) 「マトロパあるいはフォトニサ」は聖書当該箇所(次の注参照)には見られない。マトロパは単にマトローナ(年配の夫人)をさす語か。またフォトニサはラテン語の vates (予言者)の変形か。

87) サムエル上28:7-19。アウグスティヌスの著述については Fennell 244を参照のこと。フェンネルによれば、クールプスキーはアウグスティヌスに言及するが、イヴァンの方はアウグスティヌスのことなど聞いたことがなかったであろうという。

88) 詩篇94:20か。

を指している。

さてもし困難な命令や受けいれがたい法令を発布したツァーリや支配者が滅び行くのだとしたら、受けいれがたい勅令や法律を制定するのみならず、己が国土を荒廃させ、臣民を一族諸共乳呑児まで容赦せずに滅ぼしてしまう者たちは、なおのことその家門ともども根絶やしにされることであろう。そもそも支配者は皆己が臣民を敵の手から血をもって守らなければならないのだ。ところが伝えられるところでは、彼らは純潔なる処女を多数集めては馬車に乗せ、己が館に引きずり込み、その純潔を容赦なく汚しているという。5人、6人の妻では満足できないというわけだ⁸⁹⁾！それでも足りずに、清き処女らにたいし口で言うのはばかられ、耳で聞くのも耐えがたいおぞましい仕打ちをしたのだ。ああ何という不幸、何と痛ましいことだろう！われらの敵、悪魔はわれらの自立心と意志とを何たる底なしの深淵に引きずりこみ、つき落とすことだろう！

汝の地から当地にやって来た者たちは、他にも数多くのことを次から次へとわれらに話してくれる。さらに何万倍も厭うべき、瀆神の行いばかりである。だがそれらを記すのはさし控えよう。本書簡を簡潔にせんがためであり、キリストの裁きを待とうと思うからである。わたしは指で口に封をし、ただただ驚き、嘆き悲しむのみである。

かくの如く聞くに辛く、耐えがたい事柄にもかかわらず、汝は今なお生命を与える十字架の力が、汝と汝の軍勢に助力するだろうと思っているのだろうか。ああ汝は第一の獣と巨大な龍の手下。太古の昔から神と天使たちに敵対し、神の全創造物と全人類を滅ぼそうと望んできたかの龍の手下である！⁹⁰⁾ 一体これほど長期にわたって己の良心に背き、キリスト教徒の血を吸いながら、汝はな

89) 前述（「イヴァン第二書簡」注（15））の如く、イヴァンは生涯に七度結婚したと言われている。（研究者によって回数のおえ方に若干の差がある。）1579年段階では6度目の結婚生活をしていた。シュテーリンがデンマーク使節ウルフェルト（のヤコブ）に従って記すところでは、晩年のイヴァンにはリヴォニアから連れてきた、高貴な家柄出身の50人の側妻がおり、彼の行く所にはどこへでも従って行ったという。またオプリーチニキによる集団的凌辱については、シュターデン、シュリヒトウングらも伝えるところである。

90) 黙示録13：1，12：3か。

お飽くことがないのであろうか。かくも長期にわたって深き惰眠と夢から醒めず、神の、また人間を愛する天使たちの傍らに立とうとしないのはなぜなのであろうか。

己が治世の最初の日々を思い起こすがよい。当時汝の統治は祝福に満ちていた！

汝自身と汝の家門を滅びに追いやってはならない！

ダビデは「不正を愛する者は、自分の霊を憎む」と述べている⁹¹⁾。そうであるならば、キリスト教徒の血に浸る者が、一族諸共たちまちのうちに消えうせるのも当然のことである！何ゆえ汝はそれほど長く、重い病の床に大の字になって横たわり、昏睡に陥いった如くに躰をかいているのか。

目を醒ましてとび起きるがよい！遅すぎるということはないのだから。なぜならわれらの靈魂が肉体に別れを告げるときまでは、われらには悔い改めのために神から自立心と意志とが与えられており、それはわれらがよりよき存在に向上できるように、奪われることがないからだ。

神が与える薬を受けとられよ。それは癒しがたい死の毒をとり除く、と言われている。この毒を汝ははるか以前に、追従者やその父たる残忍な龍から手に入れて、たっぷりと飲んでいた。誰でもこの薬を内なる人とともに味わうならば、聖なる金口が受難週的第一の説教のなかで、使徒ペテロの改悛に関連して記した如くなるであろう。すなわち、「これを飲んだ後、心砕けたる者の祈りが涙の使者を介して、神のもとに届けられるのである。」賢者にたいしては以上で十分である。アーミン。

わが君主ステファン王の町ポロツクにて、ソコル占領後の第四日に記す⁹³⁾。

コーヴェル公、アンドレイ・クールプスキー。

[完]

91) 詩篇11:5か。

92) 上の引用文は聖金口ヨアンネス・クリュソストモスの受難週第一説教にはみられないという。詳しくは Fennell, 247, n. 5。

93) ドリッサ河畔のソコルはステファン・バトーリー軍により1579年9月11日に占領された。従ってこの付記は9月15日の執筆ということになる。

〔後記〕

以上で『往復書簡』は終わったように見える。すでにクールプスキーはその第二書簡において「この世では沈黙を守り、あの世においてキリストの玉座の前で……大胆に語ることの方がよいと判断した」と語り、第三書簡でも「これ以上異国にいる家臣に書こうなどとは思わないでいただきたい」と記していたし、イヴァンの方でも、すでに記した如く、もはや答える気力を失っていたように見えるからである。イヴァンはそもそもクールプスキー第二、第三書簡を受けとっていなかった、と考える研究者もいる。この場合イヴァンには答える必要がなかったことになる。ところが比較的最近グレアムは、イヴァンがクールプスキー第二、第三書簡を読み、さらにそれに答えていたとする仮説を提唱した。(Грехем, Вновь о переписке, стр. 178) 彼が注目するのはイヴァンがステファン・バトリー王に宛てて書いた1579年10月1日付の書簡である。(アメリカの研究者ウォーが古文書館で発見し、公刊した。 АЕ за 1971 год, стр. 359-361.) この短い書簡のなかでイヴァンはクールプスキーに5度も言及し、彼を激しく非難している。これは当時プスコフにいたイヴァンがクールプスキー第二、第三書簡を受けとり、読んでいた証拠である、とグレアムは考えている。クールプスキーがポロツクでその第三書簡を書き終えたのは9月15日であり、そこからプスコフまでは数日で届いたに相違ないというのである。(第二書簡は第三書簡とともに発送された。) かくてイヴァンの上記バトリー宛て書簡は、本質的にはクールプスキーを念頭において書かれた非難の書簡だ、というのがグレアムの仮説である。確かにクールプスキー第二、第三書簡とイヴァンの上記書簡の間には内容上の厳密な対応関係がないので、グレアムの仮説には弱点もある。だがこの仮説は、両者の直接的論争がクールプスキー第三書簡で終わったにせよ、論争そのものは必ずしもまったく途絶えてしまったわけではないことを示したといえよう。